

平泉学研究年報

第4号

令和6年

世界遺産平泉保存活用推進実行委員会

序

岩手県では、世界遺産に登録された遺産及び周辺の歴史遺産を総合的に調査研究し、その成果を広く公開し活用していくため、研究機関の整備を検討しています。その一環として、平泉遺跡群の中核遺跡である国指定史跡「柳之御所遺跡」の発掘調査を進めるとともに、「平泉文化研究機関整備推進事業」によって、研究者相互の連携、多角的・学際的な研究の推進を図るための共同研究など、研究基盤の整備と拡充に取り組んでおります。

令和2年度からスタートした「平泉文化の総合的研究基本計画」(第3期)では、令和6年度までの5カ年計画において5つのテーマを設定し、岩手大学と岩手県が2つのテーマで共同研究を行うほか、岩手県と国立研究機関等の研究者との共同研究を計画しております。それらの研究成果については、「平泉学研究会」および「平泉学フォーラム」などを通じて、多くの皆様へ研究成果の公開と情報発信に努めているところです。

岩手県及び岩手県教育委員会は平泉文化研究体制整備の観点から、令和3年11月に開館した「平泉世界遺産ガイダンスセンター」を研究の拠点として、今後も世界遺産平泉の有する価値への理解を深めるため、発掘調査や平泉文化の情報発信を推進して参りたいと考えております。

今年度刊行する「平泉学研究年報」第4号は、主に県と岩手大学の共同研究成果を掲載する「平泉文化研究年報」とともに、県と国等の研究機関の研究者による研究成果をまとめたものとなります。

今後も本年報が平泉文化の研究を進展させる一助となるよう努めて参ります。

最後に、共同研究へのご理解とご協力をいただいた関係機関に深く感謝を申し上げます

令和6年3月

岩手県教育委員会
世界遺産平泉保存活用推進実行委員会

目 次

I 基調講演

「北・東アジアからみた平泉」

妹尾達彦（中央大学名誉教授） 1

II 研究報告

研究報告1「平泉の彼岸と此岸の造形に係る比較研究」

（その四）絵画における景観描写—山、水、および空

岡田 健（奈良大学教授、国立文化財機構東京文化財研究所 名誉研究員） 33

研究報告2「出土文字資料の集成的研究」

平泉出土文字資料へのアプローチ（4）「磐前村印」

三上喜孝（国立歴史民俗博物館 研究部教授） 47

第4回平泉学研究会・第4回平泉学フォーラム実施報告 56

例 言

- 1 本書は世界遺産平泉保存活用推進実行委員会が実施した「第4回平泉学フォーラム」での基調講演及び研究報告を掲載したものである。
- 2 1の事業「第4回平泉学フォーラム」については、岩手県、岩手県教育委員会、岩手大学、岩手大学平泉文化研究センターと世界遺産平泉保存活用推進実行委員会が連携して実施した。
- 3 本書の編集は、岩手県教育委員会事務局生涯学習文化財課が行った。

基調講演

「北・東アジアからみた平泉」

妹 尾 達 彦

はじめに

今日は、「北・東アジア都市史からみた平泉」という演題でお話しさせていただきます。題目の「北アジア」と「東アジア」の定義は結構難しく、その問題を論じだすと長くなりますので、今最初の画面（図1参照）に出ていますように、大体の位置関係をおさえる、ということで進ませていただきます。

本日の講演は、1. 「地球の都市史」、2. 「北・東アジアと平泉」、3. 「平泉の政権思想の系譜」との3つの論題で進めます。最初に、大きな地球の歴史について話し、だんだんと焦点を絞って平泉にたどりつきたいと思います。

私自身の専門は、文献史料にもとづく7～8世紀の中国都市史の研究ですので、マクロな地球全体の歴史も、平泉の歴史についても、本来は専門的に話しできる能力はありません。そこで、私の専門とする7～8世紀の都市史を軸とし、その前後の歴史にも論及することで、できる範囲で、世界史の中に平泉を位置づけてみたいと思います。

1. 地球の都市史

最初に、ユーラシア大陸、アフリカ大陸を合わせた地域の歴史の舞台をみていきます。ユーラシア大陸の歴史は、大きく時期区分すると、紀元前1000年紀のときに生まれた古典国家（第一期）から、4世紀～7世紀の変動期を経て誕生する農業地域と遊牧地域を包み込む大きな国家の形成期（第二期）、それが解体して今私たちが住んでいる近代国家が生まれてくる時代（第三期）、の三時期に大きく分けることができます。

ユーラシア大陸の普遍思想家は、北緯30°～40°の農牧境界地帯に生まれる

人類の普遍思想が生まれ、多くの人々が集まり、汎用性をもつ生活様式をつくった地球の地域は、比較的限られます——もちろん、どの地域にも歴史があることを前提としているのですが——。その地域とは、ユーラシア大陸では北緯30度から50度の間に集中しています。例えば、図1 地球における主な古典国家の立地と普遍思想家の生地のように、孔子や老子、孟子、仏陀（ガウタマ=シッダータ）の誕生の場所、さらに、イオニアの哲学者やイスラームの思想家たち、そういった人々は北緯30度から40度の間で生まれ、活動し、そこから世界に思想を広めていきます。

この理由は、ユーラシア大陸の自然環境と歴史が密接に関連していたからです。現在の国家の直接の源流をなすユーラシア大陸の古典国家は、紀元前1000年紀に北緯40°前後の遊牧地域と農業地域に、南北に対峙した形で誕生します。遊牧地域の古典国家は、騎馬戦術に長けた軍事的に圧倒的な力を持つ国家です。その国家ができることによって、農業地域の政治組織が再編されて、中心地も移動していきます。人類の最初期の国家は、紀元前3000年紀前後に、北緯30°前後のエジプトのナイル川流域、メソポタミアのティグリス・ユーフラテス川流域、インダス川流域、長江流域、そして黄河流域——長江流域と黄河流域は水路でつながっています——などの農業地域で誕生します。人類最初の都市国家が生まれた地域です（図1参照）。

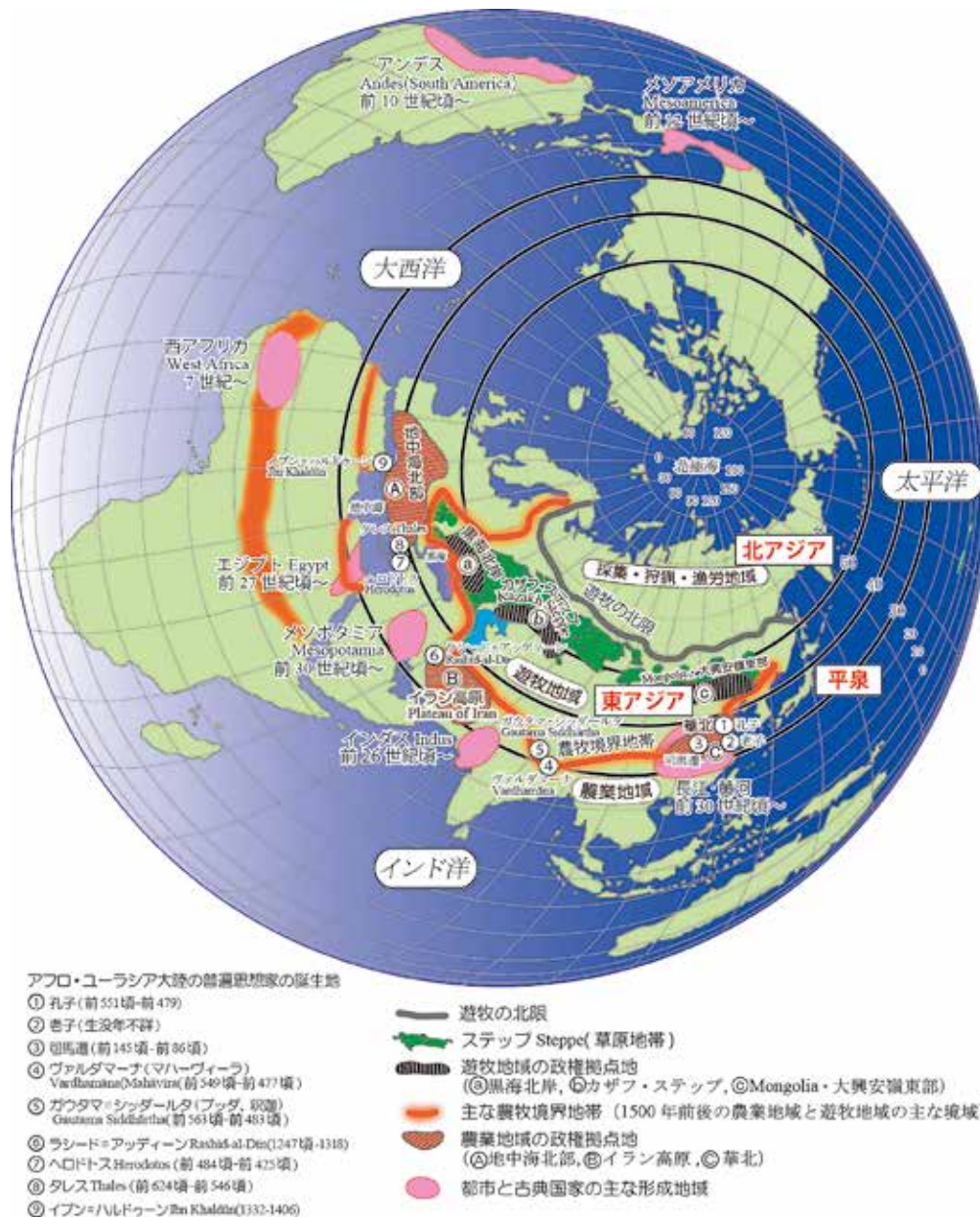


図1 地球における主な古典国家の立地と普遍思想家の誕生地

前1000年紀における遊牧地域と農業地域における古典国家の形成

それが、前1000年紀に遊牧地域に遊牧国家が生まれることによって、農業地域における貿易と軍事の主要舞台が、北方に移動していくことになります。それは、遊牧地域の勢力と対抗するためには、どうしても遊牧地域に隣接する地域に政治拠点を置かなければいけないからです。軍事的には、圧倒的な遊牧騎馬軍団に対抗するためには、遊牧地域から良い軍馬を手に入れなければいけない。遊牧国家の組織力に対抗するために、農業地域の人々は、遊牧政権と対峙する場所に集権的な政治組織を整え、遊牧政権に対抗せざるを得ない状況に陥るわけです。軍事とともに、遊牧と農業の境域における生業の異なる物産の交易も進展し、一段と重要性を増します。このようにして、ユーラシア大陸の農業遊牧境界地帯を境域として、その南北の農業地域と遊牧地域に、それぞれ古典国家が誕生していきます。

遊牧政権の樹立を可能にしたユーラシアン・ステップ（ユーラシア大陸の草原地帯）

遊牧地域の優勢をもたらした自然環境として、ユーラシア大陸の北緯40°～50°の間を東西につなぐ草原地帯（ユーラシアン・ステップ）の存在があります（図1参照）。遊牧民は、この草原地帯を馬で連結することで、広域の遊牧国家の建設を可能にしたのです。ユーラシアン・ステップの中でも特に豊かな牧草をもつ地域は、3つあります。黒海の北岸、カスピ海の北側（カザフ草原）、モンゴル高原・大興安嶺東部の草原地帯です。ここに歴代の遊牧国家の拠点が置かれることになります。そして、その南側の地域に、農業地域の政治・軍事・経済センターが置かれるという連動現象が生じていきます。

ユーラシアン・ステップと中国大陆の農牧境界地帯は連結する

中国大陆に目をやれば、図2 中国大陆の文化伝播帯^{コンタクトゾーン}で描いたように、農業地域と遊牧地域の境域をなす農牧境界地帯が、モンゴル高原・大興安嶺の東北から、チベット高原の西南方にかけて斜めに走っています。これは、アラビア海から吹く季節風の影響です。南方からの季節風が、チベット高原東方の山々につづかって、その東側に雨を降らせる一方、西側の高原は乾燥地域になり遊牧地域になるからです。この生態環境の境界領域に、農業も遊牧もできる農牧境界地帯が、東北から西南にかけ



図2 中国大陆の文化伝播帯^{コンタクトゾーン}

【出典】妹尾達彦「東アジア都市史と紅河流域」 黄曉芬篇『古代東アジア都市の構造と変遷』東京：同志社、2022年、308頁図3を改図。

て延びている訳です。農牧境界地帯は、様々な文化を伝える文化帯として重要な役割を果たします。中国大陸の農牧境界地帯は、先ほどのユーラシアン・ステップとつながり、ユーラシア大陸の中央部・西部と中国大陸を連結します。農牧境界地帯は、前近代のユーラシア大陸における最も重要な交通幹線でした。例えば、青銅器の鑄造は、ユーラシア大陸の中部で生まれ、ユーラシアン・ステップと農業遊牧境界地帯を通じて、短期間のうちに技術が中国大陸に伝わっています。

平泉の境界性とユーラシア大陸

平泉が立地する今私たちがいるこの北緯約39度の地域は、12世紀前後は、北緯40°～50°にかけて広がる東北アジアの遊牧・狩猟採集地域と農業地域の境界地帯に類似しており、日本列島の農業を主とする地域の北限にあたっていました。ただし、日本列島は大陸から海で隔離された島なので、遊牧という生業が存在しないことが、大陸との大きな違いです。平泉の立地する地域は、大局的にいえば、異なる環境の境域に位置するという点で、ユーラシア大陸の農牧境界地帯と歴史構造の上で類似します。そこで、環境の境域のもつ歴史的な意味を、ユーラシア大陸の遊牧地域と農業地域の境界地域を事例に、具体的にお話ししようと思います。

ユーラシアン・ステップの景観

北緯40°～50°のユーラシアン・ステップの景観について説明します。ユーラシアン・ステップは、農牧境界地帯の北方に位置し、遊牧地域を東西一万数千キロにわたって延びています。羊や馬が放牧される、とても豊かな牧草地帯です。まず、西方の東欧ハンガリーとルーマニアの草原地帯からです。私は、2009年秋にこの地域を旅しましたので、その時の写真を映します（写真省略）。スイスのチューリヒからハンガリーのブカレストまで行く高速鉄道に乗り、ウィーンを出てハンガリー平原に入ると、広々とした平原の風景が車窓に広がります。そこは、18世紀まではプスタと呼ばれている遊牧地域で、13世紀のバトゥの率いるモンゴルの遠征軍は、ここまで来ています。今は、草原ではなく畑になっています。

ハンガリー平原からルーマニアに入ると、カルパティア山脈にぶつかります。ここは、ドラキュラ伝説や数々の民話の妖精たちの故郷トランシルバニア地方の一部です。ここを東方に抜けるとルーマニア平原に出ます。ルーマニア平原は、黒海北岸のウクライナ平原につながり、さらに中央アジアの草原へと続きます。この草原地帯の自然環境は、基本的に同じです。そのため、東西の人と家畜、文化の移動が容易となります。この草原を馬に乗って東西に移動すれば、陸地を車輛で移動するよりも、もちろん徒歩で移動するよりも、はるかに早く安全に移動することができます。ユーラシアン・ステップは、16～18世紀を境に地球に海路の時代が始まる以前は、ユーラシア大陸の重要な幹線の一つでした。

ユーラシア大陸の草原地帯の東端は、モンゴリアン平原です。この写真は、8世紀から9世紀にかけてのウイグルの都オールド・バリクです（写真省略）。当時の中央アジアを代表する遊牧国家ウイグルの都の跡です。今、発掘が進められていて、全貌が明らかになりつつあります。以前は、遊牧民は国家と都市をつくらない考えられていたのですが、近年の研究と発掘によって、遊牧民を組織化し騎馬軍に基づいてつくられる遊牧国家と、広域経済圏の貿易拠点としての都の存在が明らかになっています。7～8世紀におけるユーラシア大陸の広域経済圏の形成を受け、初めて誕生した草原の都です。飛行機から写した赤外線写真でみると、宮殿の跡や人々が住む居住지가、格子状に広がっています。大街をはさむ住居区は隊商宿になっていて、キャラバンが泊まるための施設になっているのです。

ウイグルの都の東方に進むと、今のモンゴル国の首都ウランバートルに着きます。写真1は、ウランバートル南方の草原風景です。このような草原の景観が、1万数千キロにわたってユーラシア大陸の西から東に続いています。ユーランシアン・ステップの交通上の重要さを、おわかりいただけたと思います。



写真1 Uigurの都城・オールド・バリクOrdu-Baliqの東門遺址（2010年9月撮影）
〔解説〕ハンガイKhangai山脈の東麓の草原に立地。8世紀半ばに造営された草原で初めての大規模都城。

ユーランシアン・ステップの南方に誕生する農業地域の古典国家

草原に拠点をおく遊牧地域に匈奴を始めとする古典国家が生まれると、その南側に秦漢を始めとする農業地域の古典国家が誕生します。すなわち、ユーランシアン・ステップの東方では、中国の華北の政権（秦漢）が建国し、真ん中はイラン高原、すなわち今のイラン（ペルシア）にペルシア帝国が建国し、西側はローマ帝国が誕生します。

このように、前1000年紀に、エジプトからローマに——地中海の南岸から北岸に——政治中心が移動したのも、メソポタミナからイラン高原に政権拠点地が移動したのも、黄河流域が政治中心となったのも、今お話ししましたように、遊牧地域における遊牧国家の形成にともない、農業地域の政治中心が北方に移動せざるを得なくなったからです。

ユーラシア大陸の幹線交通網と境界都市

図1で描いた地球の生態環境と歴史の関係をより概念化しますと、図3 共同体間都市（境界都市）と共同体内都市のようになります。このように、ユーラシア大陸の東西は、同じ環境の四種の交通幹線（①草原帯・②オアシス帯・③農牧境界地帯・④沿海帯）で結ばれています。一番最初に説明しましたユーランシアン・ステップが、図3の上の図の①草原帯です。その南方の砂漠の中に②オアシス帯があり、その南方に③農牧境界地帯、さらに④沿海地帯と4つの同じ環境の帯が層状に続いています。これらの東西の同じ環境の帯が、東西を結ぶ交通幹線となり、ユーラシア大陸を縦横に結ぶ交通網をつくりだします。

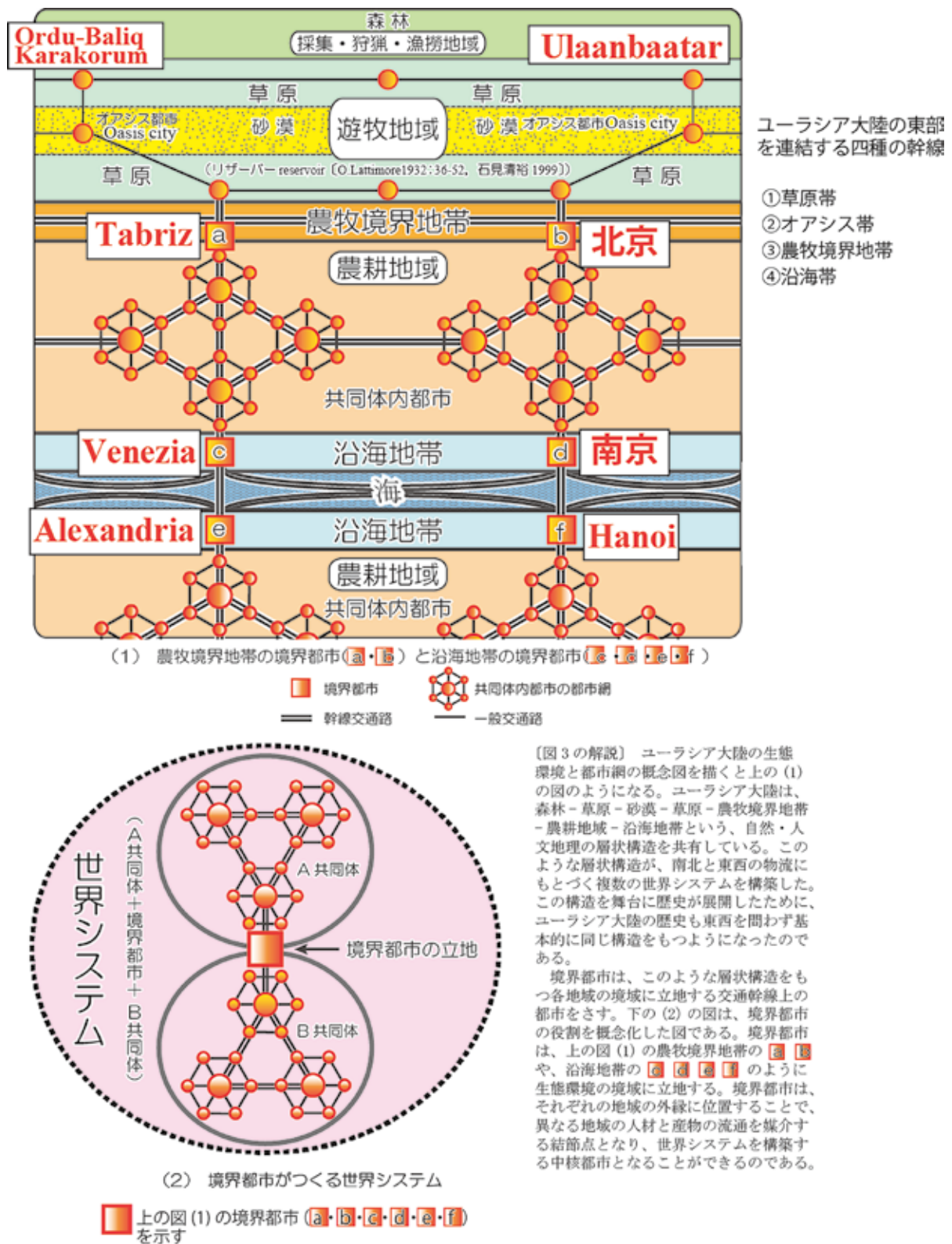


図3 共同体間都市（境界都市）と共同体内都市

【出典】妹尾達彦『グローバル・ヒストリー』（中央大学出版部、2018年）：13頁図3を改図。

一方、南北方向は、緯度によって環境と生業が異なるので、環境の帯の境域に、異なる産物を交換する都市が生まれます。四角の中に書いた北京やタブリーズ（Tabriz 現在のイラン西方）、これら

の環境の境域のところに置かれた境界都市が、図3の下の図の境界都市の概念図で描いたように、異なる生業の産物が交換され、大きな交易圏をつくる結節点の役割を果たすことになります。南京やヴェネツィアなどの沿海都市は、4～7世紀の人間移動を契機に内陸から沿海へ都市化が進展したことによって、陸域と海域の境界都市となった都市になります。

12世紀の藤原政権の拠点である平泉も、広い意味でいえば、図3の下の図の境界都市のように、日本列島における境界都市だったと思います。12世紀の平泉は、北方の蝦夷、オホーツクにつながっていく狩猟採集地域と、南方の京都につながっていく律令国家の農業地域の境界領域に位置し、太平洋と日本海をつなぐ位置に立地したがゆえに、日本列島北部の大きな世界の中心としての役割を果たすことができたと思うわけです（後掲の図12 平泉の境界性が広域経済圏を創造するを参照）。

人類史における二つの大移動期

ユーラシア大陸に戻ります。ユーラシア大陸では、図4 アフロ・ユーラシア史の二つの大移動期：4～7世紀と16～18世紀で図化したように、4～7世紀にかけて大きな変動が生じ、今まで南北に対峙していた遊牧と農業の政権が、一つに統合される状況が生まれます。世界史における1回目の大



図4 アフロ・ユーラシア史の二つの大移動期：4～7世紀と16～18世紀

【注】本図の参考文献は、文末の「図参」

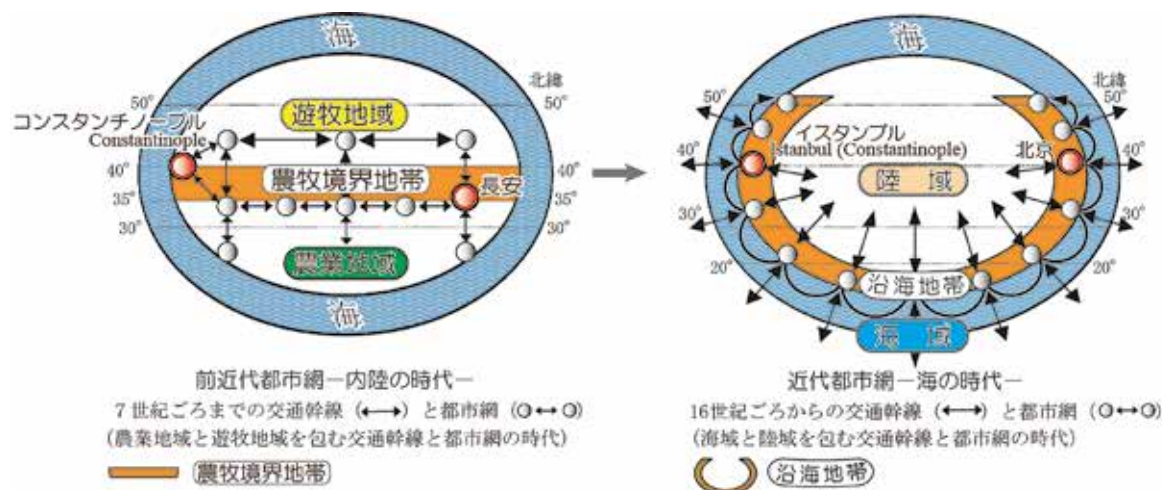


図5 アフロ・ユーラシア大陸の幹線交通網の転換：陸から海へ
【出典】妹尾達彦『グローバル・ヒストリー』（中央大学出版部、2018年）：12頁図2を改図。

きな人間移動です。2回目は16世紀～18世紀に起きる、いわゆる新大陸の発見によって大西洋圏を中心とする港湾都市網ができ、植民地経営を基にヨーロッパが台頭する契機となった時期です。

人類史において、4～7世紀と16～18世紀の二つの大規模な人間移動期は、アフロ・ユーラシア史の枠組みをつくります。前者は、遊牧民の農業地域への移動を契機に生じたユーラシア規模の大規模な人と文化の移動期であり、後者は、アフロ・ユーラシア大陸の人々のアメリカ大陸への移動を契機に生じた、地球規模の人と物産の移動期です。ともに、人間と家畜や食材、疾病、技術、宗教、思想の衝突と交流を促進し、既存の人類の生活様式を変容させる契機となりました。

4～7世紀の遊牧民の移動は、人々の沿海地帯への移動と沿海部の開発を促進し、図5 アフロ・ユーラシア大陸の幹線交通網の転換：陸から海への示すように、幹線交通網は、徐々に、内陸から海路に移動していきます。

日本列島の歴史構造と平泉

それでは、日本列島はどうだったのでしょうか。ユーラシア大陸の歴史が内陸の時代は、日本列島は、海で隔てられているために、ユーラシア大陸から比較的隔離されています。しかし、4～7世紀におけるユーラシア大陸の大混乱が日本列島に及んだ結果、日本の国家形成が進み、7～8世紀にかけて律令国家が生まれます。

日本列島の歴史を考える際、農業地域が九州から北へ拡大するとともに、政治中心も北へ移動したために、列島の南北関係をおさえることが大切だと思います。中国大陸や朝鮮半島の公設道路網をモデルに、列島内の幹線道路網としては、内陸の街道が南北方向に造成されます。その後、沿海地帯の開拓が発展するに従って、日本列島全体が沿海路のネットワークの中にのみ込まれ、16世紀以後は、太平洋圏と日本海圏の2つの東西の大きな海洋圏が生まれ、京都から江戸に政治中心が移ります。

このような日本列島の歴史構造を概念図で描くと、図6 日本の本州島の主な交通幹線と歴代政権都市の概念図のようになります。12世紀の平泉は、南北関係とともに東西関係が列島において重要性を増していく時期にあたります。南北関係でいえば、難波・平城・平安京に代表される従来の政治中枢地である近畿圏を離れ、鎌倉とともに北方に新たな政権の拠点地が生まれ、17世紀以後に日本列島の政治中心が江戸に移動する契機をなした都市です。

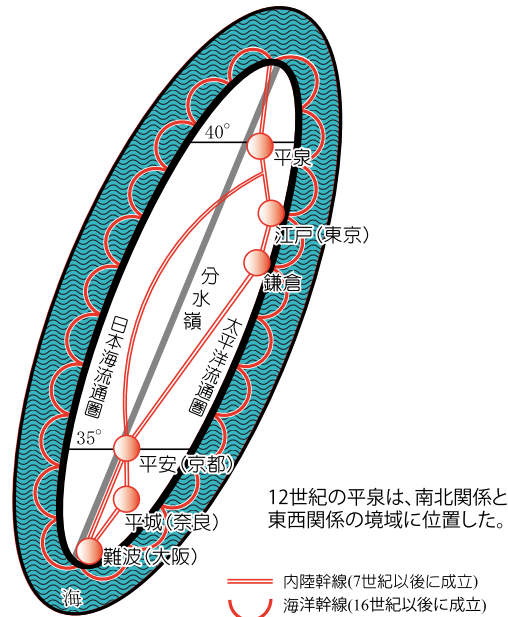


図6 日本の本州島の主な交通幹線と歴代政権都市の概念図

【出典】本図の参考文献は、文末の「図参考文献一覧」を参照。

2. 北・東アジアと平泉

次に、12世紀の平泉の政権が誕生するまでのユーラシア史を、改めて概観してみようと思います。その際、4～7世紀の変動が起点となります。4～5世紀の中国華北の動乱を描いた図が、図7 4～5世紀の変動：中国大陸華北です。この時期に、アフリカとユーラシア大陸の両方を包み込む遊牧

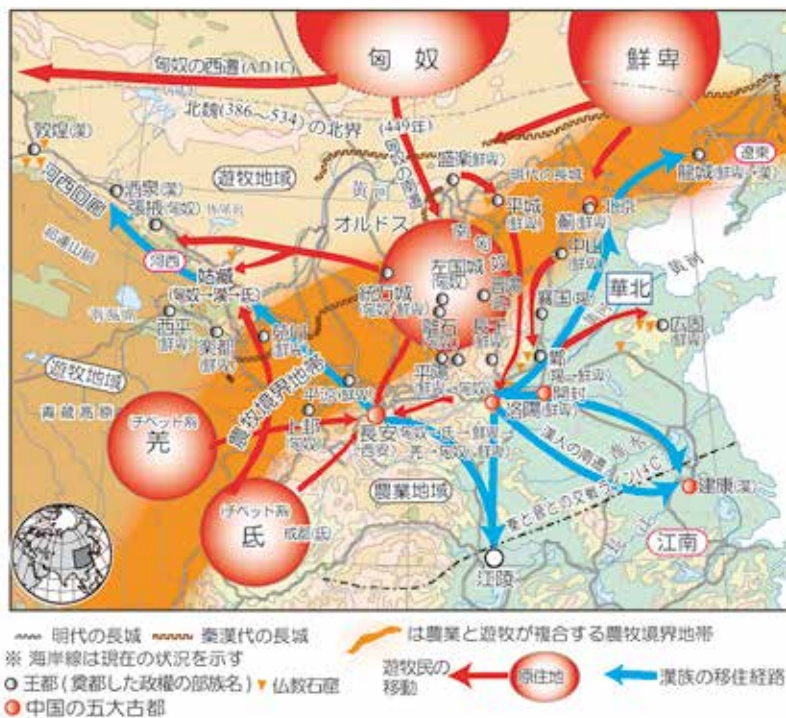


図7 4～5世紀の変動：中国大陸華北

【出典】妹尾達彦『グローバル・ヒストリー』（八王子：中央大学出版部、2018年）：73頁図33。

民の移動が生じ、それに伴って玉突き状に様々な人間と文化の移動が生まれ、日本列島もその波の中にのみ込まれていきます。この時期の混乱の中から、仏教、イスラム教、キリスト教に代表される世界宗教（普遍宗教）が社会に浸透していきます。

4～7世紀の人間移動と日本列島

4～7世紀の変動の要因については、恐らく北半球における年平均気温の低下と乾燥化が生じたからだと思います。中国史料に、気候変動の記録がたくさん残っています。4～6世紀は、日本の古墳時代にあたり、この時期は古墳寒冷期と言われています。遊牧民は、寒冷化して牧草が枯れていくと家畜が生育できず、政権を維持することができないので、大量の家畜を従えて、より暖かく、よい牧草が確保できるところに移動せざるを得なくなっていく。このような状況が、ユーラシア規模で生じたために、大きな変動が生じたのではないかと推測されます。

4～7世紀の中国大陆の華北の変動では、恐らく100万人規模の農業地域の住民が、遊牧民の進入する華北の混乱を避けて、長江流域に逃げていきます。このような人間移動は、東アジア全域におよんだのかも知れません。遺跡の人骨等からゲノム（DNA上の全遺伝情報）を抽出し解析する近年のパレオゲノミクス解析によれば、現代の日本人の祖先集団は、縄文・弥生・古墳時代の3つの祖先集団からなり、古墳時代にユーラシア大陸から日本列島に渡ってきた人々の祖先集団の規模が一番大きいといいます（Niall P. Cooke et al. 2021）。4～7世紀の大陸における人間移動の波動は、日本列島にも直接およんだと考えられるのです。

4～7世紀の人間移動は、現在のヨーロッパも形成します。ゲルマン諸部族の移動は皆さんもよく御存じだと思うのですが、その結果、フランク王国が生まれ、今のヨーロッパの諸国の原型が生まれてきます。日本列島における国家形成とヨーロッパにおける国家形成は、同時代の現象なのです。

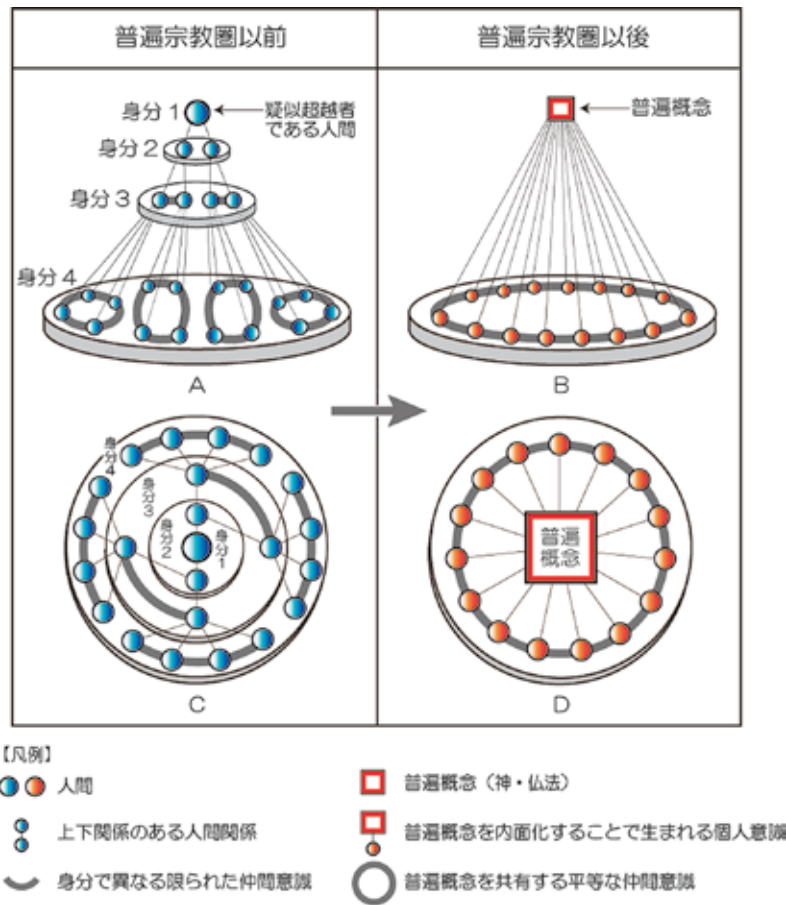
4～7世紀の人間移動が普遍宗教圏を誕生させた

4～7世紀の変動は、人々に大変な辛苦、苦難をもたらしました。今までの住んでいた共同体が分解され、親と子がばらばらになり、今までの組織も壊滅してしまっ、個人が生きていく道を自分で探さなければいけないという状況に陥り、そのために、新たな人々のネットワークが必要となります。今までの共同体の人間関係にとらわれない、もっと幅広い、ばらばらに散らばった人々を一つにつなげていくネットワークです。それが普遍宗教（世界宗教）だったわけです。

この時期に必要なネットワークには、普遍宗教のほかにも、法律の制度とか、共通の言語とか文字とかがありますが、最も重要で基本的なものは、普遍宗教です。その結果、7～8世紀に仏教圏、イスラム教圏、キリスト教圏がユーラシア大陸の東西に併存する状況が生まれていきます。

普遍宗教は、何を人間社会にもたらしたのでしょうか。それは、**図8 普遍宗教がつくる新しい人間関係**が描いたように、新しい人間関係をもたらしたのです。普遍宗教の誕生は、近代社会を生み出す契機の一つとなります。なぜかといいますと、**図8**のように、イスラーム教のアッラーや、仏教の仏法（ダルマ）、キリスト教の神という普遍概念の共有によって、「普遍のもとでの平等」という近代思想の源流が生まれるからです。今までは、共同体を救う集団救済が宗教の基本的な姿勢だったので、4～7世紀以後は、ばらばらになった個人を救済する普遍宗教の時代が訪れます。普遍宗教圏の形成によって、今までにない広域にわたる人間の組織化が可能になってくるわけです。キリ

スト教やイスラム教や仏教を用いることによって、広域にわたる人間組織が生まれ、それにもとづく広域国家の政治組織が可能になるということです。



普遍宗教圏の誕生は、近代社会を生み出す契機の一つとなった。図で概念化したように、普遍宗教圏における神 God や、アッラー Allah、仏法（ダルマ）(真理) dharma という「普遍のもとでの平等」という近代思想の源流が生まれるからである。集団の救済ではなく個人を救済する普遍宗教の普及とともに、身分や共同体からの人間の相対的な自立がもたらされ、個人意識が育まれた。

図8 普遍宗教がつくる新しい人間関係

【出典】妹尾達彦「世界につながる唐帝国」岡美穂子編『つなぐ世界史1 古代・中世』（東京：清水書院、2023年）：93頁図2を改図。

遊牧民の移動が低湿地の開拓を進展させ、日本列島の国家統一を促した

4～7世紀における遊牧民の農業地域への移動は、今まで人の住む場所ではなかった低湿地の開拓を本格化させ、人々が沿海地帯に移住することを余儀なくさせます。干潟（ラグーナ）におけるヴェネツィアの都市建設は、騎馬戦術に長けるが海戦には弱いゲルマン諸部族の攻撃を避けるためであり、中国江南の建康（南京）の都市整備と長江下流域の定住化と都市化も、華北に侵入した遊牧民の騎馬軍団を逃れた人々が主体となり、低湿地帯の微高地に移住し低地を開拓しながら進められました。

この結果、中国の江南に拠点をおく東晋・南朝（317～589）の各王朝が、豊かな耕地と貿易に支えられた比較的安定した政権を確立し、海路を用いて東南アジア諸国や朝鮮半島の百済と密接に交流するようになります。百済は、東南アジアの文化とも通底する南朝の江南文化を受容し、中国江南の政治哲学や文芸、仏教、庭園文化等が、主に百済の文化と融合して日本列島に伝わり、日本文化の基

層の一部を構成するようになるわけです。江南から日本に伝わった仏教文化は、7～8世紀以後に主に伝わる中国華北や新羅、渤海の仏教文化と融合し、12世紀の平泉において華開くわけです。

海にかこまれた日本列島の国家建設も、ユーラシア大陸における港湾都市網の形成とともに7世紀に確立しました。倭国や日本国の遣唐使や遣周使は、7世紀初頭に開鑿された大運河に連結する江南の沿海地帯の港湾都市をめざして渡航しました。大運河東岸の海岸部に達すれば、大運河沿いの沿岸都市をたどり、内陸水運によって都の洛陽まで安全に行くことができたのです。

このようにして、8、9世紀から少しずつ海の時代が始まるのです。7～8世紀の東アジアに国家が生まれ、都城が造営されると、都城を中心とする幹線交通網が整備されて、海のルートと内陸のルートが連結して広域にわたる国際交流が可能になります。ここに、国際関係が成立するわけです。恒常的で安全な交流は、7～8世紀以降にならないと不可能です。

図9 7～8世紀における東アジア都城時代の誕生は、7～8世紀の東アジアに誕生した国家と都城を描いており、図10 都城時代以後の東アジア都城と平泉：12～18世紀は、7～8世紀に生まれた都城の時代が、その後の沿海路の交通網の時代になって、沿海部と連結する都城に変貌する様を描いています。平泉は、このような、東アジアにおける内陸から沿海への交通網の転換の中で仏教都市を建設したのです。図11 8世紀の東アジア幹線交通網は、7～8世紀の国家と都城時代に、各国家の都城を結ぶ幹線交通網が初めて系統的に整備され、今日の東アジア国際関係の基礎が誕生する状況を描いています。



図9 7～8世紀における東アジア都城時代の誕生

【注】本図の参考文献は、文末の「図参考文献一覧」を参照。



図10 都城時代後の東アジア都城と平泉：12～18世紀

【出典】Seo,Tatsuhiko, "Trends in the Comparative History of the Traditional Capitals in East Asia:Origins of "the Trenditional Capitals Epoch", "Asian Research Trends New Series, No.8 (2013), Tokyo:The Toyo Bunko, p.83,fig.2.



図11 8世紀の東アジア幹線交通網

【注】本図の参考文献は、文末の「図参考文献一覧」を参照。

平泉と環太平洋圏

平泉の特色は、図12 平泉の境界性が広域経済圏を創造するで描きましたように、京都と同様に、太平洋沿岸と日本海沿岸両方ともアクセスがいいということです。これはとても重要なことです。なぜなら、奥羽山脈を軸に川が東側と西側に流れていく地形を利用して、日本列島をかこむ広域の沿海経済圏に接続できるからです。もちろん、北方には北海道に伸びて行く交通の幹線が延び、南方には鎌倉、京都に延びる幹線があります。環境の境域に立地する境界都市という点において、12世紀の平泉は特権的な位置にあったと思います。

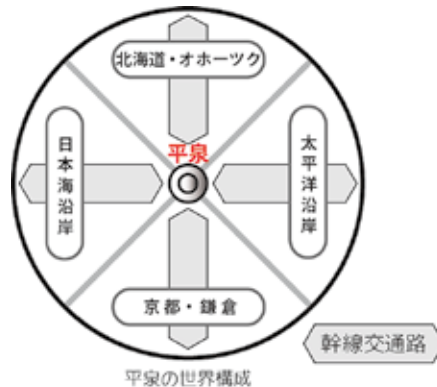


図12 平泉の境界性が広域経済圏を創造する

北方世界と平泉との関連を考える時、環太平洋文化圏の中に平泉をおいてみる観点も大切です。この写真のように、カナダのバンクーバーの街からは、ジョージア海峡をはさみ、海洋交易の拠点地となったバンクーバー島が見えます（写真省略）。このバンクーバー沿海は、古くから、太平洋東岸の沿海部の島嶼部を通じてベーリング海峡に達し、北海道から日本本州島の東海岸にまでつながる沿海路を構成しています。島を伝いながら、カヌーでカナダからアラスカの沿海部まで航海できるのです。アラスカからは、千島列島を経て北海道に至る海洋ルートにつながります。

このような北半球の環太平洋圏が、沿海の航路を媒介に一つの文化圏をなすことについては、近年研究が進んでいます。たとえば、『古事記』を北米をふくむ環太平洋圏の神話の中で見直す研究などです。宮沢賢治の「氷河鼠の毛皮」を昔読んだ時、私も、12月の26日の夜8時、吹雪の中をイーハトヴを出発する最大急行がベーリング行きであることに、想像力を強く刺激されました。その時は、なぜベーリング行き列車とその乗客たちが登場するのか、深く考えなかったのですが、その後、環太平洋圏文化論の存在に接し、イーハトヴが北アメリカにつながる大きな北方世界の起点に位置することに気づき、納得できました。宮澤賢治の神話的想像力に、改めて驚かされます。「氷河鼠の毛皮」は、見事なストーリーです。

3. 平泉の政権思想の系譜

平泉の政権を支えた思想は、仏教思想と言われています。平泉の人々にも、仏教信仰は浸透していました。図13 平泉の都市空間は、中尊寺を聖なる中心とする仏教都市としての平泉を描いたものです。12世紀の平泉の仏教思想といえば、浄土思想や法華経、華嚴経、天台密教の教えなどが併存し融合する複雑な状況だと思います。これらの仏教の教えと藤原政権や平泉の人々とが、どのような関係をもっていたのかが問題となります。このような課題は、仏教史の専門家でない私には、どうてい考

察不可能な課題です。しかし、仏教と平泉に関係にふれずして、平泉を語ることはできません。ここでは、中国都市社会史を専門とするものの立場から、中国における仏教王権論と平泉仏教の関係について、できる範囲でふれてみたいと思います。

儒教の王権論と仏教の王権論

4～7世紀のユーラシア大陸の混乱の結果、ユーラシア大陸東部（東アジア）では、仏教の普遍宗教圏が形成されました。中国における伝統的な王朝交替は、不徳な君主に替わり有徳の君主が新たな王朝をひらく、^{えきせいしかくめいろん}易姓革命論という儒教思想で統治が正当化されてきました。ところが、仏教圏の形成とともに、儒教の王権論に加え、仏教の王権論に基づく王朝の正当化がなされるようになるのです。とりわけ、中国で初めて女性皇帝となった武則天（今まで則天武后と呼ばれてきました）が、仏教の王権論の助けを借りて、唐朝（李唐）から周朝（武周）への易姓革命を成し遂げた事例が有名です。女性君主の武周王朝が仏教の王権論にもとづき誕生した事件は、当時の東アジア各国に大きなインパクトを与えることになります。日本列島の倭国も、国家建設に際し直接に強い影響を受けます。ちなみに、日本という国号は、702年、倭国からの国号変更の要請を、武周の武則天皇帝が公認することで、初めて国際的に定着しました。

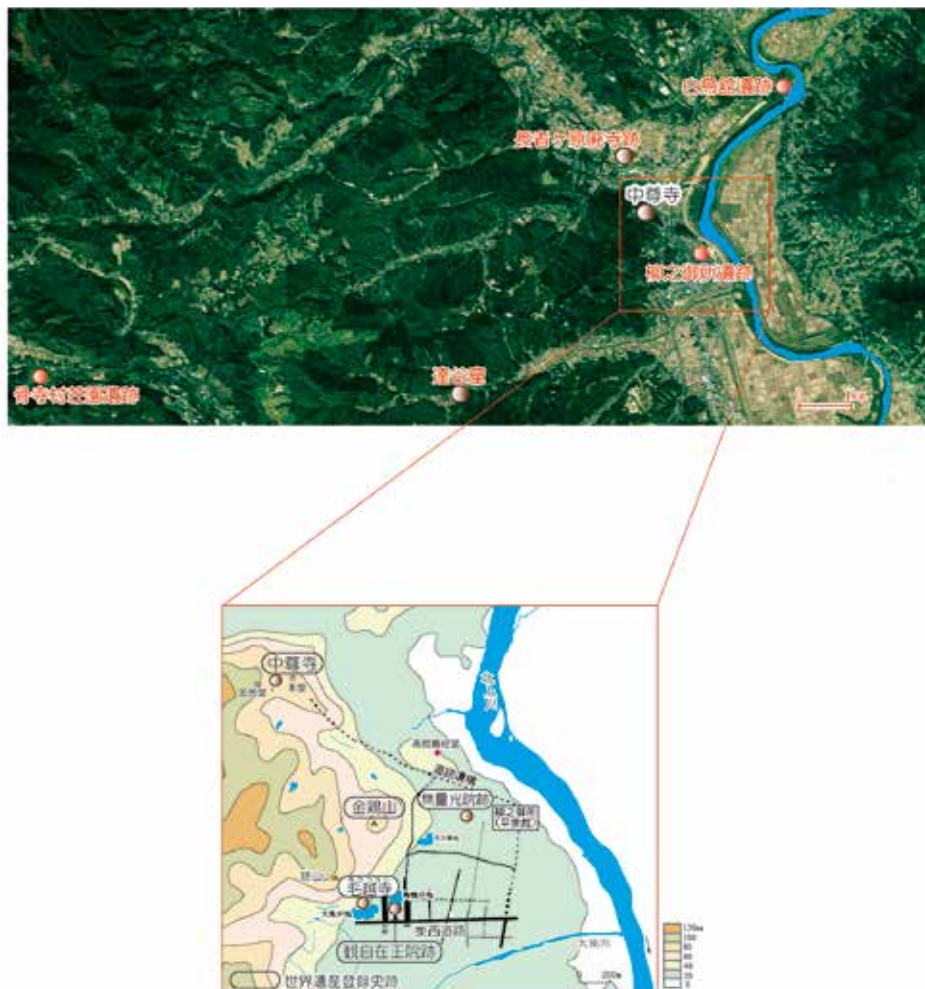


図13 平泉の都市空間

【出典】 富島義幸「平泉の都市空間と仏教建築」（『都市・平泉』日本考古学協会2001年度盛岡大会研究発表資料集、2001年）35頁図を改図。

東アジアに誕生した仏教都城：武周の神都洛陽

上述のように、7世紀末、史上初めての女性君主・武則天をいただく武周王朝（690～705）が、唐朝に替わって中国大陆に誕生しました。この政権交替を、唐周革命とよびます。東アジア各国に与えた武周の仏教王権誕生の衝撃は、今まで考えられていた以上に大きいと私は考えています。とくに、女性天皇の伝統をもつ倭国にとって、朝鮮半島の政局において長年の敵国だった唐に替わる新たな女性君主の王朝が誕生したことは、倭国の外交の立て直しに大きなチャンスを与えることになりました。政治は男性がつかさどるとする儒教の王権論（律令はこの儒教思想にもとづいています）では、倭国の女性天皇を正当化することは不可能です。東アジア各国が、儒教の王権論ではなく、仏教にもとづく女性君主が誕生することによって受けた衝撃の大きさを、おわかりいただけたと思います。

倭国は、701年の大宝律令の成立にもとづく倭国から日本への国号変更など、周到的準備を経て、702～704年、32年ぶりに中国大陆に使節（遣周使）を派遣します。そして、倭から日本への国号の変更を公認してもらうことに成功し、日本と武周との友好関係を樹立します。その時の遣周使は、当時の仏教を始めとする最新の大陸情報を日本に持ち帰り、710年、新たに仏教都市としての平城京の造営にいたります。平城京は、遣周使の見聞をもとに、武周の神都洛陽と長安の両京をモデルにつくられたものです。平泉政権の仏教思想は、平城京において武周をモデルに確立した仏教王権の思想が、平安京を通して後に伝わったものと思われる。

恐らく、平泉の仏教政権の源流の一つをなすと思われる武周の仏教王権の在り方を、武周の都城となった神都（洛陽）を舞台に説明します。図14 武周・神都洛陽の都市空間は、仏教王権の都城となった7世紀末から8世紀初めの神都洛陽を描いています（武則天は洛陽を神都と改称しました）。神都洛陽の中核をなす建築は、宮殿の明堂です。明堂は、もともと儒教の理想的な政治が行われる聖なる空間なのですが、武則天は、弥勒が下生する化城、転輪聖王の御す七宝台（仏法にもとづき理想的な政治を行う転輪聖王を象徴する七種の宝をもつ舞台）、そして道教の仙宮と位置づけ、仏教と儒教と道教のすべてを融合する新たな聖空間としての明堂を創造するのです。ただ、明堂の建築思想の核をなすのは、もちろん仏教です。

明堂の西北には、仏像をおく天堂があります。実質的に仏教寺院なのですが、天堂は儒教の天の思想と融合する名称になっています。明堂の南方には、武周の統治空間を象る天枢が建造され、転輪聖王として天下に君臨する武則天を象徴します。神都外郭城南門の定鼎門の南方には、龍門の石窟寺院があり、東大寺の大仏のモデルとされる盧舎那仏が彫られています。このような仏教にもとづく武周王権を正当化する論拠となった經典が、『大雲經』（『大雲經疏』）、『宝雨經』、『華嚴經』（『大方広仏華嚴經』）、『金光明經』（『金光明最勝王經』）等の經典です。これらの經典は、日本の王権の正当化にも大きな影響を与えました。



図14 武周・神都洛陽の都市空間

【注】本図の参考文献は、文末の「図参考文献一覧」を参照。



図15 華藏世界：敦煌の絹画「華嚴經变相図」
(10世紀頃 絹本彩絵 規画：194×179cm) フランス・ギメ美術館所蔵。
【注】 本図の参考文献は、文末の「図参考文献一覧」を参照。

上掲の図15 華藏世界：敦煌の絹画「華嚴經變相図」は、蓮に抱かれた華嚴世界が描かれています。本図は、「華嚴經變相 七処九絵」（10世紀初、パリのMusée Guimet 蔵、絹画）は、武則天の周王朝（690-705）に増補訳出された「八十卷華嚴經」（699年に実叉難陀<652-710>により完成した）にもとづくものです。この図の正確な制作年は不明で、10世紀初頃と推測されています。図の中央を基準に、左右相称に配置された「九会（くえ）」の形で「昆盧遮那仏華嚴經世界」を表現しています。

ジャック・ジェス氏によれば、「最下部の図様は華藏世界を示すもので、それは彩雲と蓮華の列との間に大きく弧を描く色さまざまな多数の風輪（各種の象徴的な標幟を描き入れる）によってまず表されている。さらにこの華藏世界を特徴づけるものとして香水の満ちた大海から左右二体の竜王に支えられて咲き出した穢れを知らぬ大輪の蓮華（不染蓮華）が認められる。經典によれば華藏世界とはこの大きな花の上に四方に門を開いた城壁に囲まれた無数の世界（百億千世界）の様式化された表現として記述されている」（ジャック・ジェス著、協力・尾本圭子、秋山光和・尾本圭子訳1994）ということです。恐らく武則天は、このような華嚴の普遍的な世界を意識していたのではないのでしょうか。本図から、仏教の理想都市として神都洛陽を莊嚴しようとした武則天の王権思想を、想像することができると思います。

このように、中国大陆において初めて女性君主となった武則天が、武周王朝を建国するに際し、転輪聖王思想や弥勒下生信仰など仏教の王権論にもとづき政権の正当化をはかったことは、遣周使を通して日本列島に伝わり、当時の天皇政権や後代の政治権力の正当化に大きな影響を与えたと思われます。平泉政権の仏教思想も、武周を画期とする仏教王権の系譜の中に位置づけられると思います。

中尊寺建立供養願文のもつ意味：平等の主張

今、東京国立博物館で中尊寺金色堂の特別展が行われております（2024年1月23日～4月14日）。中尊寺金色堂の国宝が一堂に会する、見事な、本当に驚くべき特別展です。平泉政権が、仏法にもとづく地域政権をつくろうとしたことは、『吾妻鏡』等の史料に書かれていますが、特に重要な史料となるのが、中尊寺建立供養願文です。先日、初めて願文の現物（藤原輔方筆）を東京国立博物館の特別展で見ることができ、感激しました。文章はとても格調が高く、内容は複雑な構文となっており、願文の本意を探らねばならず、正確な解釈が難しい文章としても有名です。ここでは、中尊寺建立供養願文のもつ意味を、本講演の文脈の中において考えてみたいと思います（以下の解釈は、妹尾達彦2016を参照）。

平泉政権は、神仏習合のもとで天皇政権の持続をはかる京都の「中華思想」に対し、あくまで仏法を論拠に地域政権の独自性を主張しました。そのことは、『吾妻鏡』に、藤原氏が、白川関から外浜にいたる大道の一町ごとに笠卒都婆をたて、平泉を仏教寺院で莊嚴したと記す著名な文章や、藤原清衡が大伽藍の落慶供養で読み上げたと言われる「中尊寺建立供養願文」などからうかがえます。

「中尊寺建立供養願文」は、一貫した論理にもとづいていますが、前稿（妹尾達彦2016）で論じたように、二重の意味をはらんでいるように感じます。一つは、京都の法皇・天皇政権との対立を避けたいという藤原側の思いです。願文は、京都を強く意識しており、京都との対立だけは避けなければならないということが前提になっています。そのために、京都の政権を徹底して持ち上げ、天皇政権の優れた治世を寿ぐための鎮護国家や報国、奉国、天恩、聖代の語を、繰り返し用いる文章構造になっています。

その理由は、巨費を投じた大伽藍の造営に象徴される藤原氏の独自の政策に京都側が強い猜疑を抱いており、この願文は、その猜疑に対する平泉側の申し開き、弁明だからと思われます。願文の全体

が、平泉が京都の政治秩序にあくまで従っており、決して対抗する意図はないことを主張し、今回の伽藍造営によって、京都の法皇・天皇を中心とする仏教世界がさらに豊かなものになることが強調されています。願文には、当時の平泉と京都の天皇政権、さらに鎌倉政権との間の緊張をはらむ複雑な外交・人間関係が存在しています。

もう一つの意味として、本音の部分があり、藤原氏は、仏教にもとづき京都の価値観の相対化を試みていると感じます。そのことは、本願文において、中華と夷狄を序列化して京都を中心化する儒教の華夷思想の用語（蛮陬・蛮夷・夷落など）と、中華と夷狄の違いを相対化する仏教の用語（仏土・平等など）が、対照的に現れることに端的に示されています。

例えば、「徼外の蛮陬たるといえども、界内の佛土というべし」という有名な文章があります。つまり、夷狄であるにもかかわらず、壮麗な伽藍のたつ平和で繁栄する平泉の地は、（文化の中心をなす京都から離れた）徼外に住む蛮夷の地ではあるが、（逆にそのゆえに、普遍的な仏法のもとでは）仏土に属す地となるとのべている。平泉は、蛮陬（夷狄）にして仏土、という主張です。

同じく、「二階の鐘樓一字、廿鈞の洪鐘一口を懸く」の文に続け、「右、一音の覃^{おほ}ぶ所は千界に限らず、苦しみを抜き楽しみを与え、普く皆平等なり。官軍・夷虜の事に死せしこと古来幾多にして、毛羽鱗介の屠を受けしこと過現無量なり。精魂は皆他方の界に去り、朽骨はなお此土の塵となる。鐘声の地を動かすごとに、冤霊をして浄利に導かしむ」とあり、寺の鐘の音によって、戦いでなくなった（京都の天皇管轄下の）官軍と（蛮夷の地の）夷狄をはじめ、生きとし生けるものすべてが、平等に成仏できるとする仏教の教えが記されています。この文も、仏法のもとでは平泉も京都も平等である、という認識が基調となっています。もともと、平等の語は漢語には存在せず、仏典の翻訳語として登場した漢語です。

ここで想起されるのは、中国大陆において、五胡十六国時代を始めとする歴代の非漢族政権が、仏法に依拠して、儒教の王権論にもとづく中原政権の中華意識を相対化していく戦略を常にとることです。たとえば、羯族出身の後趙の君主・石虎（在位334-349）が、「仏は外国の神であり、中華の天子の信じるものではない」という官僚の批判に対して、「朕は、辺境の夷狄（辺壤）の出身だが時運を得て、君主として中国（諸夏）に君臨している。中国伝統の天のまつりは従来の伝統に従うべきだが、仏は夷狄の神であるので、まさしく我々がまつるべきものだ」（『大正大藏經』第50冊、385c）と述べ、仏教はもともと外国の神（戎神）であるゆえに夷狄出身の自分にふさわしいと論じています。辺壤（夷狄）と諸夏（中華）を対語としつつ、本来の意味を転倒させる文章構造は、自らを「東夷の遠酋」と称する「中尊寺建立願文」とも類似します。

非漢族の君主は、夷狄の宗教である仏教を信奉することで、伝統的な儒教や道教とは異なる価値観を表明することが常でした。上記の石虎等の非漢族の為政者による仏教崇拝を批判する、唐朝の道教徒の文にも、「（仏教は）蛮陬を褒めて中土となし、諸夏を貶めて偏方となす」（『全唐文』巻925、吳筠「思還淳賦」）とあり、仏教は、華夷の違いを逆転させ、本来は蛮陬の地であるのにそこを中土と主張し、逆に中華の地を辺土と見なすと記されています。ここには、蛮陬（夷狄）と諸夏（中華）の意味を反転させてしまう仏教思想への道教徒側のいらだちが、表現されています。

もちろん、中尊寺願文自体は、平泉を中土、京都を辺土と主張するものではありません。しかし、この願文は、自らが夷狄であることを表に出すことによって、夷狄であるがゆえに、仏法のもとではだれもが平等であり、あらゆるものの上に超越的価値である仏法があることを主張しており、この点において、京都の相対化を意識した戦略的な文章といえると思われます。逆にいえば、平泉にとって、仏教以外に京都に対抗できる普遍論理は存在しなかったといえるでしょう。

推測になってしまいますが、もしも、平泉政権が、義経の軍事的才能も活用して鎌倉政権を打倒し、平泉に幕府が開かれることがあったとしたら、平泉政権の藤原氏は、自らを転輪聖王と称し、平泉こそが転輪聖王の仏国であると主張したかも知れません。この考えは現実的ではないでしょうが、超越的な価値観を持つ仏法の存在を論拠とすることで、初めて、藤原氏は、京都や鎌倉に対し、自らの地域政権の存続を主張することができたことは確かだと思います。

おわりに ー芸能の創る平泉の劇的構造ー

最後に、今までの話をふまえ、平泉の芸能のもつ世界性について述べ、本日の講演を締めくくりたいと思います。

平泉というと、やっぱり義経なわけです（今回、水沢市を訪れることで、大谷翔平の名が義経と平泉を示すことを知りました）。平泉－義経（牛若丸）－弁慶－静御前（静は平泉には来ず、義経は正妻とともに自死するのですが）と連想してしまいます。それは、やはり、『義経記』の影響だと思います（柳田國男も「我々の祖先の中世の生活に、「義経記」ほど親しみの深かった文学は他になかろう」と書いています）。

『義経記』は、15、16世紀の室町時代にまとめられたもので、12世紀の藤原政権の時代ではありませんが、その物語性（ドラマトゥルギー）は、藤原政権時代の平泉のイメージをつくる上でも決定的だったと思います。平泉は、繁栄する政権の中核都市から陸奥の地方都市の一つに変貌したがゆえに、16世紀以後、最も人口に膾炙した物語の舞台の一つとなって、再び輝いたといえるのではないのでしょうか。

ここでは、ユーラシア大陸の放浪芸能の中に『義経記』を置くことによって、平泉のもつ都市性の歴史性について考えてみたいと思います。

まず、始まりは、やはり7～9世紀の唐の都である長安と洛陽です。ここで、初めて、放浪芸能が一つにシステム化されて、劇本になり、演劇化されるからです。専門の俳優によって露天で演じられる雑劇が生まれ、街角で盛んに演じられる一方、宮廷で演劇や音楽を教える教坊という官営の音楽施設がつくられ、長安や洛陽の芸能を支えます。屋根を持つ芝居小屋は、12～13世紀の南宋の臨安では数多く見られるようになりますが、民衆が演劇を楽しみ、民衆演劇が人々の生活を支える商業演劇の時代が始まったのは、9世紀前後です。

唐代の長安や洛陽では、民衆演劇の普及を背景に、貴族や高官の邸宅での室内楽と演劇が発展しました。室内楽というと、16世紀以後の近世ヨーロッパに生まれた貴族や新興ブルジョア階級の音楽生活をイメージすると思うのですが、7～9世紀の長安や洛陽の貴族や科挙合格の新興エリートの邸宅では、専門の芸人を雇い室内楽を楽しむ音楽生活が、すでに始まっているのです。日本の雅楽は、この長安や洛陽の民間の音楽文化に源流をもっています。

地中海のルネサンス音楽がそうだったように、キリスト教圏はもちろんのこと、イスラム教圏、仏教圏においても、音楽と宗教は密接に結びついていました。音楽形式も、普遍宗教圏が誕生した頃は、神・アッラー・仏法などの超越的存在を歌うにふさわしく、単旋律・斉唱形式だったのが、後に世俗化が進んで多旋律・合唱形式に変容して娯楽性が増し、最終的に近代の和声音楽（ポリフォニー）が生まれます。演劇形式も、音楽形式に対応して変化し、民衆演劇が生まれていきます。

図16 李寿墓（577～630年）石槨線刻《楽舞図》は、唐の初期の長安に暮らした李寿という人の石棺に描かれた線刻です。李寿は、唐の世祖（初代皇帝李淵の父）の弟である鄭孝王の李亮（543～614）の長男です。「楽舞図」と称されるこの線刻は、当時の皇族の音楽生活を示す線刻として有



■-14



■-16



図16 李寿墓（577～630年）石槨線刻《樂舞図》

【出典】西安碑林博物館。1973年陝西省咸陽市三原県李寿墓（唐高祖李淵献陵陪葬墓）発掘。孫機「唐李寿石槨線刻《侍女図》、《樂舞図》散記（下）」『文物』1996年第6期、57-58頁図。

名です。女性のみで構成される李亮の楽団の楽器構成は、笙（しょう/フリーリードReed, mouthpiece類）・排簫（はいしょう/パンパイプpanpipes, pan flute）・大箏篳（ひちりき/フルートdouble reed）・銅鈸（どうばつ/シンバルcymbal）・横笛・小箏篳・雲和（琴・瑟の撥弦楽器）・琴・四弦琵琶・五弦琵琶・箏篋（くご/ハープharp）・箏・槃鞀（鈴槃/打楽器）・腰鼓です。多くが中央アジア伝来の楽器で構成されており、女性の楽団です。日本の雅楽の源流をうかがう上でも貴重な資料です。

この他にも、室内楽団を描いた唐代の上層階層の墓は、少なからず出土しており、男性だけの宦官の室内楽団を描いた蘇思勗（?-745）の邸宅の音楽生活も著名です（写真省略）。蘇思勗自身も、玄宗（在位712-756）につかえた高名な宦官です。楽器編成は、上記の李亮の楽団と基本的に同じです。そして、このような音楽文化の基層には、民衆の放浪芸能が存在したと思います。

シルクロードの文芸の研究をされているヴィクター・メアというアメリカの研究者は、インドを起源とする放浪芸能が、ユーラシア大陸の東西に広がり、長安や洛陽にも達したと論じています（Mair, Victor H. 1988）。図17 アフロ・ユーラシア大陸における恋愛文化の伝播—前2000年～19世紀—は、メアの放浪芸能の伝播の研究も参照し、恋愛劇の伝播に焦点を合わせ、私が描いた概念図です。恐らく、民衆が最も好む物語は、恋愛劇だと思います。「放浪する男性が女性の愛情によって助けられる破滅する」、あるいは、「放浪する女性が男性の愛情によって救済される破滅する」、そのような構成をもつ恋愛劇は、人類の放浪芸能の中核をなしています（カルメンや椿姫などを参照）。

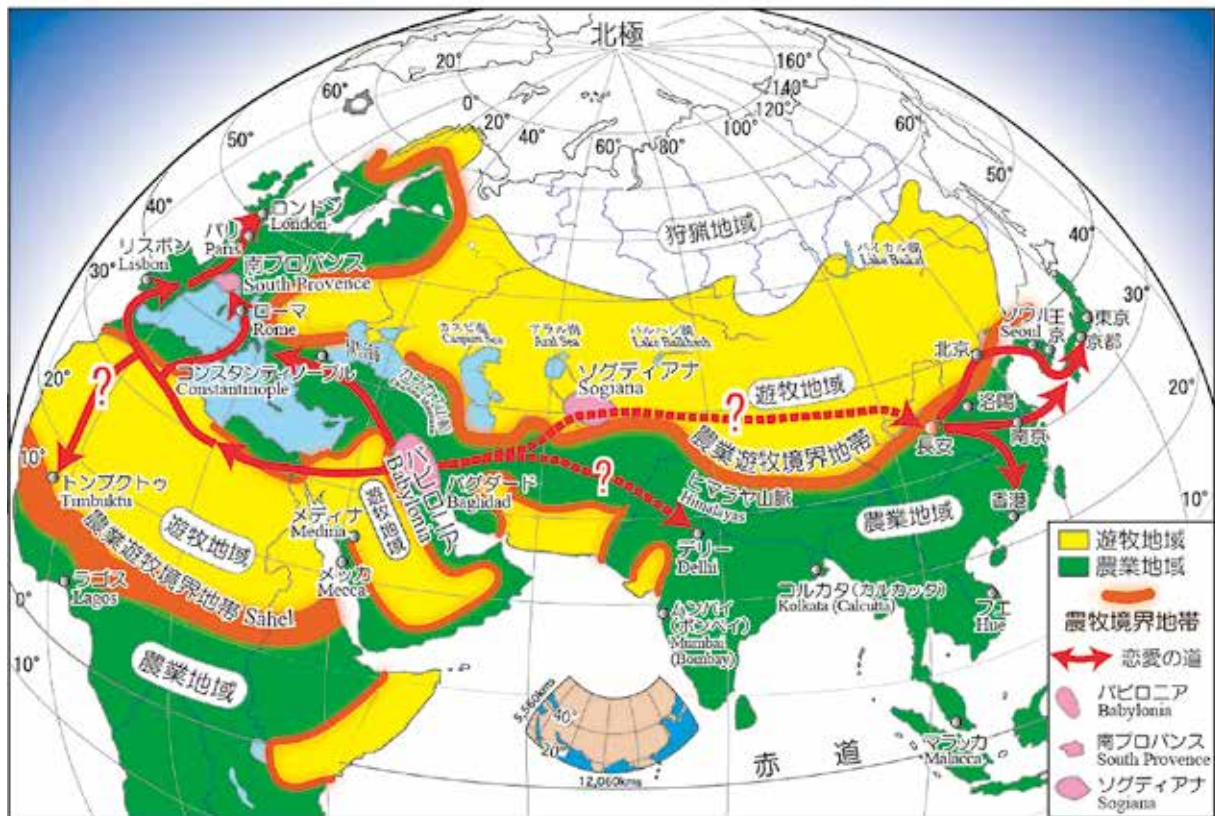


図17 アフロ・ユーラシア Afro-Eurashia 大陸における恋愛文化の伝播—前2000年紀～19世紀—
(妹尾2018)

恋愛劇の起源は、バビロニアではないかと言われています。ペルシアで洗練された恋愛劇が、イスラーム圏の拡大に合わせ、12～13世紀には、トルバドゥールと呼ばれる放浪芸人たちによって、南プロバンスに伝播し、ここで近代の恋愛劇の原型が生まれます。ちょうど、平泉の藤原政権の時期です。一方、東方では、恐らく、中央アジアから長安や洛陽を経て、朝鮮半島から日本列島に恋愛劇が語り物として伝播します。

ここでは、中国における恋愛劇の最初期の物語である「李娃伝」(9世紀成立)を紹介します。「李娃伝」は、中国の語り物の原型の一つをなします。本来放浪芸人が演じていた演劇を文人が見て、それを文語で書いたテキストが残されています。文語で書かれていたテキストから語り物芸を再現できるのか、という問題が残るのですが、基本的な物語構造は、文人の価値観が入っていても変化はないと、私は考えています。

さて、物語の始まりです――

都の長安にやってきた科挙の受験生が、都で有名な遊女に出会います。あまりにも美しい遊女にのめり込み、受験のために持ってきたお金を全部使い果たしてしまい、最終的には遊女に捨てられます。そこで、男は、長安の街衢を放浪するのです。男は、西地区(街西)の葬儀屋に拾われ、挽歌を歌う歌手として訓練を受け、都一の挽歌の歌手となります。

当時、長安の東地区(街東)の葬儀屋と西地区(街西)の葬儀屋は、年に1回長安の真ん中の朱雀街で歌合戦をする習わしでした。男は、その歌合戦の西地区の歌手に抜擢されます。しかし、彼がいては東地区に勝ち目はないので、東地区の葬儀屋が彼を秘密のうちに大金で引き抜いてしまいます。

そうするうちに、歌合戦の時がやってきました。顔を見られたら困るので、男は、頭巾をかぶって歌います。あまりにもうまいので、聴衆は感極まって涙を流します。そのときの聴衆の中に、故郷から上京しちきた男の父親がおり、息子を発見します。父は、家名を汚したと息子を鞭で打ち殺そうとします。しかし、様子を見にきた仲間が、介抱して生き返らせるわけです。ただ、鞭で打たれた身体中が膿だらけとなって腐臭を発し、とうとう介抱していた仲間からも見捨てられてしまいます。最後は、乞食をしながら、都の邸宅街をめぐるまで物乞いをするまで落ちぶれます。

ある日、雪の降る非常に寒い冬の日のこと、ある邸宅の前で歌を歌って恵みを乞うと、その家は自分を捨てたあの遊女の家だったのです。遊女は、男を見て彼を胸に抱き入れ、ゆるしを乞います。男は、遊女の助けで科挙受験を再開して合格し、父の許可を得て二人は結婚して物語は終わります。

本当はもっと複雑なのですが、物語の構造は、旅立ち→別離→転落→救済という語り物の普遍的な構造をもっています。『李娃伝』の物語構成は、放浪者の救済というモチーフにおいて、日本中世の語り物の「身毒丸」や「山椒大夫」「小栗判官」等とも類似します。「李娃伝」の後の時代の「白蛇伝」も――この物語も、歌舞伎の「娘道成寺」などに翻案され、日本の芸能に大きな影響を与えます――南宋の杭州で演劇化されたものですが、同じ恋愛劇の物語構成です。

「差別され排除された放浪者が、他者の純粋な愛情によって救済され破滅する」という物語構成は、オペラの「カルメン」や「椿姫」などに典型的のように、ユーラシア大陸で広く演じられてきた恋愛劇の普遍的なパターンです。そして、恋愛劇は、基本的に四象限の構成をとります。なぜなら、限られた舞台空間で、限られた時間の中で、劇的な物語構成を演じる時、主要な役者がそれぞれの役割を分担する四象限構造をとらざるを得なくなるからだだと思います。みなさまも、ご自身のご覧になったテレビ・ドラマや映画、小説を事例に、恋愛劇の四象限構造を検証してみてください。多くの場合、当てはまると思います。この構造は、「義経記」にも、部分的に当てはまるのではないのでしょうか。

下に掲げた図18『李娃伝』の物語構造は、前半と後半で裏返しとなる「李娃伝」の物語構成を図化したものです。図19『義経記』の物語構造は、「李娃伝」の物語構造をふまえ、「義経記」も、基本的に同じような構造を備えているのではないかと考え、図化したものです。もちろん、「義経記」は、独立した多彩な物語を編成した大きな軍記物であり、「李娃伝」のような恋愛劇ではないので、単純な比較はできません。ただ、「義経記」の中にも、図20『義経記』と大衆恋愛劇の四象限構造で描いたように、有名な鎌倉での静の舞の場面では、恋愛劇の四象限構造を見いだすことができるのではないのでしょうか。物語構造の点でも、図19のように、「義経記」では、「静若宮八幡宮への参詣の事」を媒介として「判官北国落の事」の場面に移り、前半と異なる奥州下りの悲劇が始まります（「義経記」は、岩波書店の日本古典文学体系本『義経記』1959年にもとづく）。

複雑な歴史事象を、このように概念図で単純化するのは、多様性に富んでいる歴史像を尊びながら実証的に分析する歴史学の本道からは、はずれてしまいます。ただ、モデルを立てることが、比較分析において不可欠な行為であることも確かです。その意味において、図21 物語と音楽の歴史は、実証にたえないモデルであるとしても、一つの仮説として提示させていただき、今後具体例を積み上げ、修訂を繰り返しながら分析を進める足場にできればと願います。

ここで指摘したいことは、民衆文化の普遍性です。図22 グローバル・ヒストリーの構造：普遍=民衆と固有=為政者は、人間の身体と五感（視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚）は、人類で共通するので、上述の演劇や音楽のように人類の文化は共通すること、この共通文化の土台の上に、国家や都市がつくられることを図化しています。本講演で述べるグローバル・ヒストリーの描く人類の歴史は、人間の身体と五感が本源的に求める平和と平等という合理的な価値観が、交流と衝突を繰り返しながら、それぞれの地域の人々に、それぞれの経験と方法を通して自覚化され、社会化され、人類の普遍思想として制度化されていく歴史です。「中尊寺建立供養願文」で自覚化され主張された平泉政権の仏教思想は、このような普遍的な民衆の思想の上に成り立っていたがゆえに、説得力をもち得たと思います。

12世紀における平泉政権の繁栄と滅亡の事実、後に、軍人として頂点を極めた義経が、差別されて放浪する「義経記」の語りとの融合することで、人類の文化がもつ普遍構造に昇華するのだと思います。平泉と義経の結びつきは、図22で図化したように、民衆が本源的にもつ普遍の表現です。この点において、上述の「中尊寺建立供養願文」の主張する平等の思想と、「義経記」の思想は、根本においてつながると思います。

本日は、今後検討すべき論点を数多く残す内容の粗い講演を、たくさんの方にご静聴いただき、本当にありがとうございました。

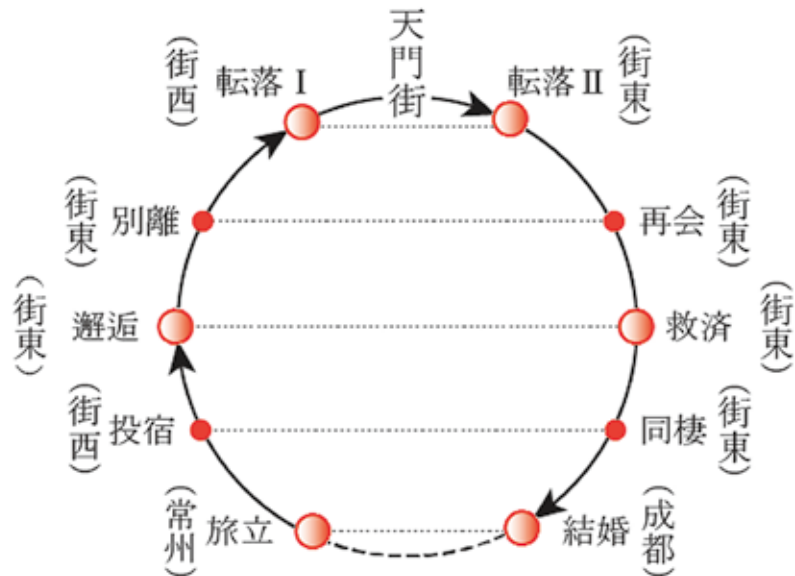


図18 『李娃伝』の物語構造

※本図は、『李娃伝』の内容を、「貴種流離譚」や「異郷訪問譚」型説話の構成と比較・参照し、物語の主な構成要素を抽出して図化したものである。(妹尾2018)

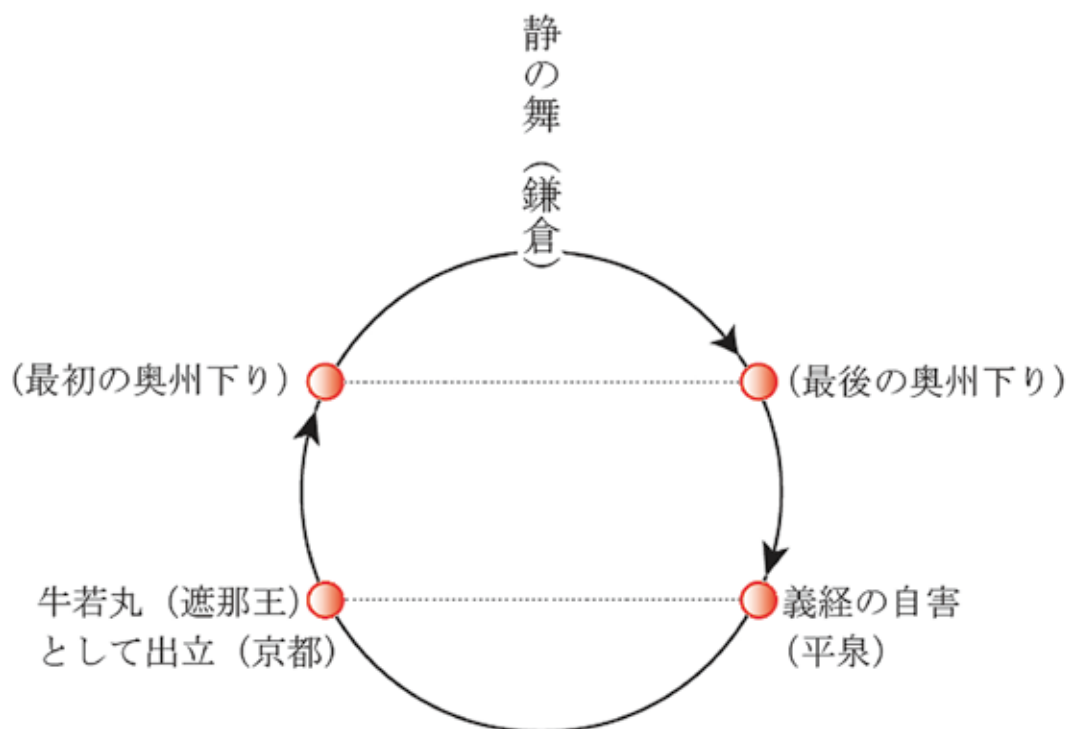


図19 『義経記』の物語構造

(妹尾2024)

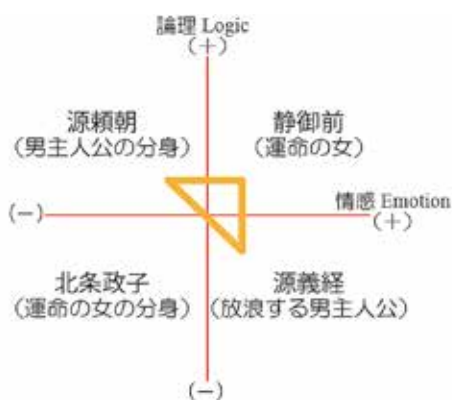


図20 『義経記』と大衆恋愛劇の四象限構造

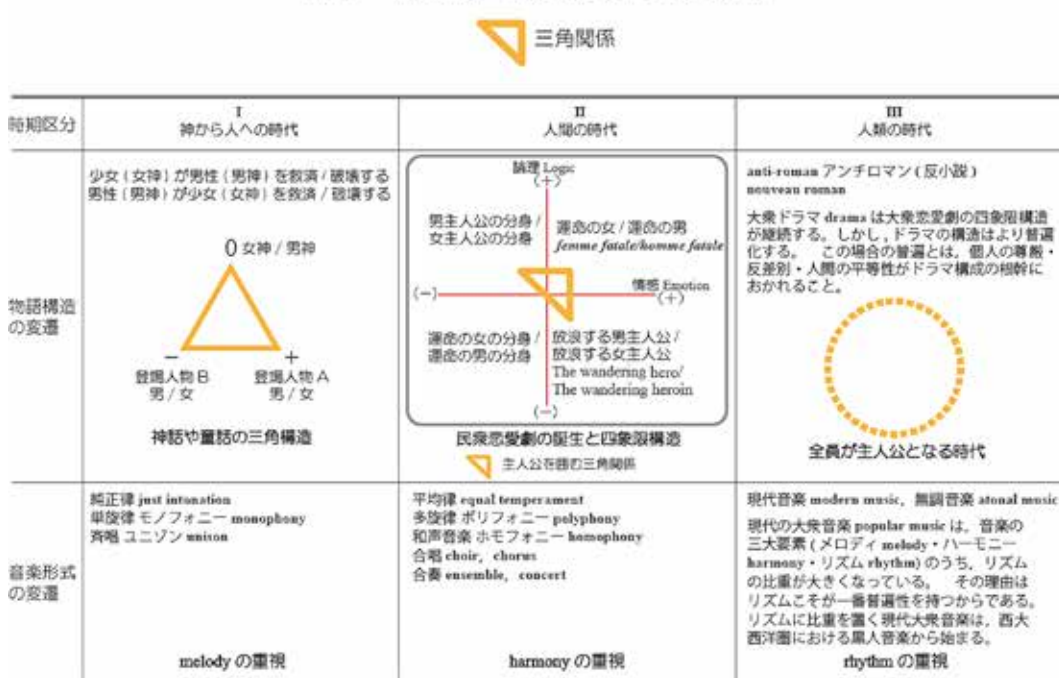


図21 物語と音楽の歴史
(妹尾2023)

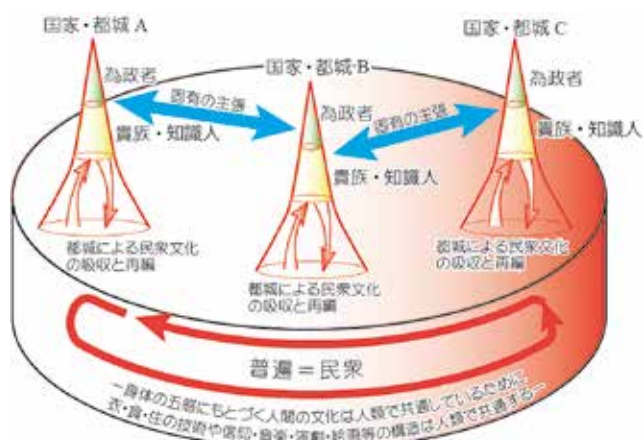


図22 グローバル・ヒストリーの構造：普遍＝民衆と固有＝為政者
【注】本図の参考文献は、文末の「参考文献一覧」を参照。

挿図出典一覧

図1 地球における主な古典国家の立地と普遍思想家の誕生地

ユーランシアン・ステップは、Cunliffe, Barry 2014、農業遊牧境界地帯は、Overyed, Richard ed. 1999にもとづく。

図2 中国大陸の文化伝播帯

妹尾達彦（2022）308頁図3を改図。

図3 共同体間都市（境界都市）と共同体内都市

妹尾達彦（2021）13頁図3を一部増補。

図4 アフロ・ユーラシア史の二つの大移動期：4～7世紀と16～18世紀

妹尾達彦（2021）72頁図32を改図。

図5 アフロ・ユーラシア大陸の幹線交通網の転換：陸から海へ

妹尾達彦（2021）12頁図2を改図。

図6 日本の本州島の主な交通幹線と歴代政権都市の概念図

妹尾達彦新図。

図7 4～5世紀の変動：中国大陸華北

妹尾達彦（2021）73頁図33を改図。

図8 普遍宗教がつくる新しい人間関係

妹尾達彦（2023b）98頁図2を改図。

図9 7～8世紀における東アジア都城時代の誕生

妹尾達彦（2024）420頁図1を改図。

図10 都城時代後の東アジア都城と平泉：12～18世紀

妹尾達彦（2016）63頁図4を改図。

図11 8世紀の東アジア幹線交通網

妹尾達彦（2024）424-425頁図2を改図。

図12 平泉の境界性が広域経済圏を創造する

妹尾達彦新図。

図13 平泉の都市空間

富島義幸（2001）5頁図にもとづく妹尾達彦（2015）26頁図9を改図。

図14 武周・神都洛陽の都市空間

妹尾達彦（2024）432頁図6を改図。

図15 華蔵世界－敦煌の絹画「華嚴変相図」

妹尾達彦（2024）435頁図7、ジャック・ジェス著、協力・尾本圭子、秋山光和・尾本圭子訳（1994）39頁「I 華嚴経変相七処九会」。

図16 李寿墓（577～630年）石槨線刻《楽舞図》

孫機（1996）57－58頁掲載図。

図17 アフロ・ユーラシア大陸における恋愛文化の伝播

Seo, Tatsuhiko 2022 p.29, Fig.6を改図。

図18 『李娃伝』の物語構造

Seo, Tatsuhiko 2022 p.20, Fig.4を改図。

図19 『義経記』の物語構造

妹尾達彦新図。

図20 『義経記』と大衆恋愛劇の四象限構造

妹尾達彦新図。

図21 物語と音楽の歴史

妹尾達彦新図。

図22 グローバル・ヒストリーの構造：普遍=民衆と固有=為政者

妹尾達彦（2022）319頁、図10を改図。

主要参考文献（著者名あいうえお順）

入間田宣夫2003『都市平泉の遺産』山川出版社

入間田宣夫2013『平泉の政治と仏教』高志書院

入間田宣夫2014『藤原清衡—平泉に浄土を創った男の世界戦略』ホーム社発行、集英社発売

岩手県教育委員会編2013『世界遺産平泉—仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群—』

岩手県教育委員会・一関市教育委員会・奥州市教育委員会・平泉町教育委員会編2015『アジア都市史における平泉—平成26年度「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究集会 報告書—』岩手県教育委員会・一関市教育委員会・奥州市教育委員会・平泉町教育委員会

岩手県教育委員会・一関市教育委員会・奥州市教育委員会・平泉町教育委員会編2016『アジアにおける平泉文化 資料集—「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究研究成果3』岩手県教育委員会・一関市教育委員会・奥州市教育委員会・平泉町教育委員会

岩手県教育委員会・一関市教育委員会・奥州市教育委員会・平泉町教育委員会編2017『奥州藤原氏が構想した理想世界—平成28年度「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究集会 報告書—』岩手県教育委員会・一関市教育委員会・奥州市教育委員会・平泉町教育委員会

上島享2010『日本中世社会の形成と王権』名古屋大学出版会

大矢邦宣2013『図説平泉—浄土をめざしたみちのくの都』河出書房新社

岡見正雄校注1964『日本古典文学大系37 義経記』岩波書店

菅野成寛監修、及川司編2020『平泉の文化史1平泉を掘る—寺院庭園・柳之御所・平泉遺跡群』吉川弘文館

菅野成寛監修・編2020『平泉の文化史2平泉の仏教史—歴史・仏教・建築』吉川弘文館

菅野成寛監修、浅井和春・長岡龍作編2021『平泉の文化史3中尊寺の仏教美術—彫刻・絵画・工芸』吉川弘文館

工藤雅樹2005『平泉への道—国府多賀城・胆沢鎮守府・平泉藤原氏—』雄山閣

工藤雅樹2009『平泉藤原氏』無明舎出版

小島毅監修、藪敏裕編2013『平泉文化の国際性と地域性』汲古書院

斉藤利男1986「境界都市平泉と北奥世界」（高橋富雄編『東北古代史の研究』吉川弘文館、463-494頁）

斉藤利男2012『奥州藤原三代—北方の覇者から平泉幕府構想へ』山川出版社

斉藤利男2014『平泉—北方王国の夢』講談社

斉藤利男2023「都市平泉史研究—中世都市研究における意義と可能性」（都市史学会編『都市史研究』10 山川出版社、61—68頁）

佐々木邦世2008『平泉中尊寺—金色堂と経の世界』吉川弘文館

佐藤嘉広2021『仏都平泉の造営と構造』同成社

- 島津久基著・市古貞次解説1977『義経伝説と文学』大学堂書店
- ジャック・ジェス著、協力・尾本圭子、秋山光和・尾本圭子訳1994「新出の二大画幅「華嚴経変相七処九会」および「華嚴経十地品変相」について」ジャン・フランソワ・ジャリージュ、秋山光和監修、ジャック・ジェス編集『西域美術 ギメ美術館ペリオ・コレクションⅠ』講談社
- 妹尾達彦2009「長安、礼儀的都－以円仁『入唐求法巡礼行記』為素材－」栄新江主編『唐研究』第15号、北京大学出版社、385－434頁
- 妹尾達彦2013・2014「江南文化の系譜（一）（二）」『六朝學術學會報』第13集、69－142頁、同第14集、2pp. 77－111頁
- 妹尾達彦2015「東アジアの都市史と平泉」（岩手県教育委員会・一関教育委員会・奥州市教育委員会・平泉町教育委員会編『アジア都市史における平泉－平成26年度「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究集会 報告書－』盛岡・同上教育委員会、3－38頁
- 妹尾達彦2016「世界史の中の平泉」『歴史評論』2016年7月号<795号>、57－69頁
- 妹尾達彦2019『隋唐長安与東亜比較都城史』西北大学出版社
- 妹尾達彦2021『グローバル・ヒストリー』中央大学出版部、修訂版（初版第一刷2018）
- 妹尾達彦2022「東アジア都市史と紅河流域」黄曉芬篇『古代東アジア都市の構造と変遷』同成社
- 妹尾達彦2023a「中部ユーラシアを動く－4～7世紀の十字路」岡美穂子編『つなぐ世界史1 古代・中世』清水書院、66－71頁
- 妹尾達彦2023b「世界につながる唐帝国」岡美穂子編『つなぐ世界史1 古代・中世』清水書院、96－101頁
- 妹尾達彦2024「東アジア都城時代の宗教空間と国際関係－武周（690-705）を中心に－」網伸也編『東アジア都城と宗教空間』京都大学出版会、418－449頁
- 孫機1996「唐李寿石椁線刻《侍女図》、《楽舞図》散記（下）」『文物』1996年第6期。
- 高橋富雄2009『奥州藤原氏－その光と影』吉川弘文館
- 東京国立博物館・NHK・NHKプロモーション編2024『建立900年特別展 中尊寺金色堂』NHK・NHKプロモーション
- 富島義幸2001「平泉の都市空間と仏教建築」『都市・平泉』日本考古学協会2001年度盛岡大会研究発表資料集3
- 平泉町史編纂委員会 編1985『平泉町史第1巻 史料編 1』平泉町
- 平泉町史編纂委員会 編1988『平泉町史第3巻 総説・論説編』平泉町
- 平泉町史編纂委員会 編1993『平泉町史第2巻 史料編 2』平泉町
- 平泉町史編纂委員会 編1997『平泉町史第4巻 自然編・民俗編 1』平泉町
- 吉田歆2014『日中古代都城と中世都市平泉』汲古書院
- Cunliffe, Barry 2014, *By Steppe, Desert, & Ocean, The Birth of Eurasia*, Oxford: Oxford University Press.
- Mair, Victor H. 1988 *Painting and Performance: Chinese Picture Recitation and Its Indian Genesis*, Honolulu, University of Hawaii Presss.
- Niall P. Cooke et al. 2021 “Ancient Genomics Reveals Tripartite Origins of Japanese Populations,” *Science Advances* (online)
- Overyed, Richard ed. 1999, *The Times History of the World, New Edition*, London: Times Books
- Seo, Tatsuhiko 2022 “Performance Spaces in Ancient Chinese Cities: Street Theaters of the 9th

Century Capital Change” in Nawata, Yuji and Hans Joachim Dethlefs eds., *Theatre History as a History of Performance Spaces and Stage Technologies: A Comparative Perspective*, Bielefeld: Transcript, pp.15-34.

研究報告1「平泉の彼岸と此岸の造形に係る比較研究」

(その四) 絵画における景観描写—山、水、および空

岡 田 健

はじめに

私はこれまで3回、平泉の浄土景観というテーマに関連して、下界から見上げる景観だけではなくその景観を創るために山から見下ろしたときの下界の景観（下界の見え方）（第1回）、山に建立された寺院、平地に建立された寺院それぞれの、人里との関係（社会環境・人文地理環境と寺院の立地）（第2回）、寺院及びその周辺地域における用地選定ための自然地理的条件（第3回）について考えた。今回は、美術作品（絵画）における景観表現、風景を描くときの視点、描かれた風景を見てその意味するところを理解しようとする視点、という観点から、平泉における、平泉の人びとにとっての景観とはどういうものか、ということを考えてみたい。

1 美術作品（絵画）における景観の表現—景観はどのように認識され、表現されるか

(1) 中国絵画のイメージ—言語化と表象化

はじめに理解しておくべきことがある。

中国の文字は言うまでもなく漢字である。「偏へん」や「旁つくり」によってかたちづくられるこの文字は、そのカタチ自体に意味が込められている。例えば景観や風景という語に用いられる「景」は、音符としての「京jing」に高い丘の意味があり、「高い丘での高まる日ざし、ひかり・けしきの意味を表す」と説明される形声文字である（『新版漢語林』大修館書店）。そして「風」は、音符の「凡fan」が風をはらむ帆の象形であり、篆文とされる「虫」の字は風雲に乗る「たつ」を意味するので、「凡」にこれを付けて「かぜ」の意味を表すという（同）。つまり人びとは、漢字自体の成り立ちにおいて、自然の事物、その動きを観察し、文字がそれらを表すものとして機能するものであることを理解していた。漢字による文章は、さらに構文とリズムを備え、豊かな表現として発展した。

それゆえに、人びとが眼前の景観、風景に対してその美しさや雄大さ、ときに厳しさを感じるとき、「ああ」と感嘆の声を発するとしても、脳内にはこれを表現するにふさわしい文字がその読みとともに浮かぶはずであるし、ときにはそれが美しい韻律とともに口をついて表出され、詩文として書写されるのである。

中国では古来、事物の具体的な図像を絵画や立体造形によってあらわすことが行われてきた。それは吉祥や不吉の表象であったり、また神仙の世界や仏教をはじめとする信教の世界観を表す、物語性をもったものであったりして、多様な題材が、多様な材料・技法により、多様な環境のもとに創り出された。こんにちその多くは姿を消したが、私たちは今なおそれらを中国の膨大な「文物」として見ることができる。これらの表象化されたイメージはすべて、脳内での（漢字による）言語化とともに創り出された、ということを意識しておきたい。

(2) 山水画の発展

中国の絵画は、宋時代の頃、山水画と花鳥画という二つのジャンルが発展した。このうち山水画は、眼前に広がる景観の認識、及びその表現のあり方についての理論的な思考、およびその文章化（言語化）によって、哲学的な領域として認識された。その発展は、唐時代以降、山水の絵が好まれ



韓休夫婦墓 北壁・山水図

瑞獣・瑞雲・天人などが描かれてきたが、山河の風景だけを取り出して描くことは比較の後世に発展した。この韓休夫婦墓に描かれていた山水画は、後の中国における山水画の初期の作例であるとして注目された。

ここで「景觀」ということを考える場合、ひとの目に山や川、湖や海、そして空がどのように見えるのか、という自然の地形や空間に対する視線のあり方が重要となる。

山水画は、特に北宋時代に遠近法に関する「三遠」という考え方が大成されたことによりピークを迎える。「三遠」とは、李成(919-967頃)、范寛(950頃-1032頃)、郭熙(1023-1085)がそれぞれの作品において示した「平遠」「高遠」「深遠」という構図である。

- ① 平遠：少し高い所に立って、手前に水あるいは平原を置いて遠くの山を見通す構図。
- ② 高遠：ふもとから見上げるように山を見る構図。
- ③ 深遠：平遠と高遠を統合し、描かれた主山の後方に、さらに広がる景色（谷や山）を見る構図



伝李成「喬松平遠図」澄懷堂美術館
(台北) = 平遠



范寛「溪山行旅図」故宮博物院
(台北) = 高遠



郭熙「早春図」故宮博物院
(台北) = 深遠

もちろん、これらは自然景に対して画家がどのような景観を見だし、それをどのように表現するか、という絵画上のテーマである。しかし、そのようなテーマが明瞭に示されればなおさらのこと、ひとは自然の景観のうちにも、その独特の構造を読み取ろうとする。

いま、私たちが研究の対象としている平泉の景観について、これをこの中国的な絵画思想のもとに直接的に描いた作品はないが、私たちが平泉の景観を見るとき、やはりこのような視線が機能していることに気づくであろう。

2 平泉の景観—自然の景観と人工の景観

従来、「仏国浄土」平泉の彼岸と此岸の造形というテーマで考えられてきたのは、柳之御所から平泉の町を西に貫いて金鶏山を見る、という視線であった。春分や秋分の日に沈む夕日は、まさに金鶏山の向こうに消えていく。間近にある金鶏山だけに注意を払えば、「高遠」にあたるとも言える。しかし山は低く、目前の無量光院、金鶏山の南方に展開する毛越寺や、観自在王院の伽藍と苑池に貯えられた水面の煌めきを見れば、これは「平遠」であるとも言える。

いっぽう、北上川東側の山から見た北上川とその東岸の平地、平泉中心部、そしてその後方に遠く広がる栗駒山を中心とした山々の景観はどうだろう。峻険な高峰がそそり立つわけではないその山並みの、果てしなく横へ、さらに奥へ広がる景色、雲が広がる天候であっても雲間の所どころから陽が射しこみ、その場所の山々が光り輝き、これらが一体となって、多彩な光景を見せてくれる。

「深遠」には、いくつかの解釈があるとされるが、この平泉一帯の眺望を見るとき、「高遠」と「平遠」を手前に置きつつ、さらに後方へ遥かに広がる、「深遠」と呼ぶべき景観を感じる。四季折々、木々が色づき、雨風霧嵐雷雪によっても賦彩の変化があり、さらに朝夕の陽光を浴びればその峰々が光り輝く眺望の美しさは、この地のかげがえのない景観であるに違いない。さらに、直接的には見えないものの、私たちは、山並みの彼方に達谷窟毘沙門堂があり、巖美溪があり、そこから磐井川をさかのぼれば、骨寺村荘園の景観があることを思い出す。そこには単なる自然の景観だけではなく、人びとが行きかい、住まい、生業を営む空間があることを知っている。

ここで大切なことは、寺院と政庁の配置、ということだけではなく、この地域の活動を支える聖俗様ざまな階層の人びとの営みが、かつてこの景観の中にあった、ということだろう。行きかう人びとの賑わい、立ち上る煙の動き、それらがあって、景観は生きたものとして感じられたはずだ。

3 浄土図に見る景観—山が表された浄土の景観

ここで、改めて阿弥陀浄土の景観を考えてみたい。

山水画がひとつの独立した絵画のジャンルとなるのはるか以前から、中国では墓室壁画や仏教壁画の画面上に、大きな空とその下にある山岳が表されることが行われていた。

古代中国の墓室壁画を見ると、そこには太陽と月が表され、星座が表される。また、飛鳥や天人など、空を飛ぶ存在が描かれる。五彩（朱と青）の雲が表されることもある。この天空を表すとき、しばしばその下方に、山岳・やまなみが描かれる。これによって天空はただの虚空ではなく、地上、すなわち現世とのつながりにおいて認識され、あらためてそこが天上であることが意識される。

私が住む斑鳩がある奈良の地は、四方を低いやまなみによって囲まれている。四季折々の景色は、まさに山の色合いの変化、その向こうから現れる太陽や月が照らし出す山の輝き、あるいはその黒い影、そして雨や風、雷、雲、虹などと一体となり、豊かな表情を見せてくれる。

斑鳩・法隆寺は背後に矢田丘陵の南端が迫る少し高台に、西に大阪との間を隔てる低い生駒山地を

見晴るかす場所に建っている。この場所は、四季を通じて強い西日に照らされる。夕刻、間もなく拝観時間が終了する頃、その日差しは西院伽藍の建物に長い影を作り、東院夢殿の中にまで達する。



平城宮跡から東方、若草山・笠置山山系を望む



生駒山の向こうに夕日が沈む

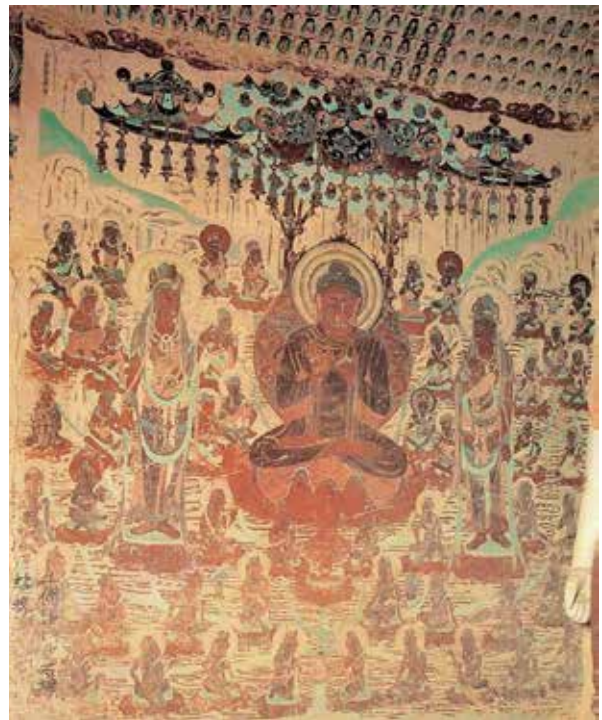
この法隆寺西院の金堂に、阿弥陀浄土を描いた飛鳥時代後期の壁画がある。第6号壁と呼ばれる。

※この壁画は、残念なことに昭和24年(1949) 1月26日の金堂の火災により焼損し、現在は専用の収蔵庫で保管されているが、昭和8年(1933)に便利堂(京都)により撮影されたカラー画像と焼損前に作られた精巧な模写によって往時の姿を見ることができる。

この壁画に描かれる阿弥陀如来と同じ形をした図像は、中国ではすでに7世紀の前半から各地で作られたことが分かり、石窟寺院の石彫像や敦煌莫高窟の壁画としてその作例が残っている。中でも莫高窟第322窟東壁に画かれた阿弥陀浄土図は、中国の大型壁画としての稀有な作例だが、この図像はほんらい阿弥陀が五十菩薩を伴い現世に姿を表したとする物語と根源を一つにするものである。



法隆寺金堂 第6号壁：旧写真



敦煌莫高窟第322窟東壁

これに対して、法隆寺金堂第6号壁阿弥陀浄土図は(古くからそのように呼ばれている)、菩薩の数は25体を数えるのみで、阿弥陀如来が坐る蓮華座に后背(背もたれ)が付くなど、従来の中国の阿弥陀五十菩薩像の作例には見られない様子がある。

ここで注意すべきは、法隆寺金堂および莫高窟第322窟の画像がともに、仏菩薩の一群の背後に山岳を描いていることである。このモチーフは、ほんらいの「阿弥陀五十菩薩」の物語においては必要とされていなかったものである。この山岳について、肥田路美氏はかつて「娑婆世界に垂降した阿弥陀五十菩薩の背景にある山岳は、彼岸(浄土)のものではなくこの世界、此岸を表現するための手だてとしたものであった」とされた(肥田路美「法隆寺金堂壁画に画かれた山岳景の意味」『佛教藝術』230号、1997年)。これに対して私は、その他にも見られる様ざまなモチーフの混淆を見ると、すでにこれが図像としての厳格な意味を持っていないとして、敢えてそのように捉えなくても良いのではないかとの立場をとった(岡田健「初唐期の転法輪印阿弥陀図像についての研究」『美術研究』373号、2000年)。だが、この図像の本尊が阿弥陀如来であり、ここに山岳が描かれていることは事実である。



秋の日、夕陽はまっすぐに西から法隆寺を照らす



法隆寺西院伽藍 夕陽は境内に長い影をつくる

晴れた日の夕刻、法隆寺に足を運ぶと、生駒山からまっすぐ日が射してくる光景に出逢う。それは季節によって方角の異同があり、建物がつくる影も方向を変えるが、様々な形と色の彩雲を伴うことも多く、また夏でも冬でも、山際では夕刻にしばしば雨が降り、雨上がりのときには東へ去った雲の方角に虹を浮かび上がらせたりする。このような山と空が織りなす豊かな景色の中に暮らしてみても、私はようやく、第6号壁に山が描かれることの意味を正しく考えてみなければ、と思うに至った。

4 おわりに

本報告書が刊行される令和6年3月は、おりしも、東京国立博物館では令和6年1月23日～4月14日の日程で建立900年特別展「中尊寺金色堂」が開催されている。平泉に関しては、近年世界遺産への登録がなされた後も、歴史学・仏教史学・建築学・美術史学など、多様な領域において研究が活発に進展している。仏教寺院の建立に関しても、藤原清衡が創建した中尊寺を中核として、基衡・秀衡時代に創建された毛越寺・観自在王院・無量光院の伽藍とそこで造像された多様な仏像、その信仰について、現存する実物資料が少ない中で、文献資料を活用した丹念な研究が進んでいる。かつて京都の王権に対抗するまちづくりと意識されていた平泉において、平等院や法成寺などを強く意識し、これを模した伽藍の造営があったことが確認されている。

いっぽう、平泉では宋から舶載された陶磁器が出土しており、はるばる宋の文化がもたらされたことを推定させるが、本報告に示したような中国絵画そのものの伝来については、知ることができない。このことに関しては、泉武夫氏は藤原秀衡発願の「紺紙金字一切経」の見返絵に見られる豊かな山水の表現に、「首都の文化的影響圏を飛び越えて、中国の五代ないし宋代の情報を直接摂取して、表現に活かしている可能性」を見ておられる（泉武夫「奥州藤原三代の絵画―経典変相図の浄土教的世界」〔『中尊寺の仏教美術 彫刻・絵画・工芸』2021年、吉川弘文館〕）。

そのような中国山水画の視点が、当時の平泉の人びとに果たしてあったのかは分からない。しかし、平泉を築いた人びと、暮らした人びとにとっての景観もまた、多くの意味を持っていたに違いない。すでに往時の人びとの痕跡は地上から姿を消したが、変わることのない山と水、そして空がつくる雄大な景観は、現在を生きる私たちに、それを教えてくれるはずである。

【参考文献】

- 宇佐美文理『中国絵画入門』岩波新書1490（2014、岩波書店）
 宮崎法子『花鳥画・山水画を読み解く―中国絵画の意味』ちくま学芸文庫（2018、筑摩書房）
 島尾新『水墨画入門』岩波新書1819（2019、岩波書店）
 菅野成寛監修、浅井和春・長岡龍作編『中尊寺の仏教美術 彫刻・絵画・工芸』（2021、吉川弘文館）

【謝辞】

本報告は、令和5年度岩手県受託研究「平泉の彼岸と此岸の造形に係る比較研究」の成果として、令和6年2月3日に開催された令和5年度「第4回平泉学研究会（研究者対象）」、および2月4日に開催された令和5年度「第4回平泉学フォーラム」において行った報告をもとに作成したものである。「研究会」では、報告に対して岩手県立大学盛岡短期大学部名誉教授菅田慶信先生より懇切なるコメントを賜った。また「フォーラム」では中央大学名誉教授妹尾達彦先生による基調講演「北・東アジア都市史からみた平泉」を拝聴する機会を得た。本報告作成にあたっては、これらを念頭に修正・加筆を行った。

法隆寺境内の写真2枚（P.38）については、法隆寺より撮影・掲載の許可を得た。

以上に対して、記して御礼申し上げます。



北上川東岸の観音山・大部ヶ岩から見た北上川とその東岸、平泉中心部、中尊寺へ連なる眺望



大文字焼き展望台周辺からの眺望 栗駒山方向に雲間から光が射し込む



はじめに

●これまで3回の研究

- ◆ 景観を創るために山から見下ろしたときの下界の見え方
- ◆ 山に建立された寺院、平地に建立された寺院、それぞれの人里との関係
- ◆ 寺院及びその周辺の（自然地理的）立地環境

◆今回◆美術作品（絵画）における景観表現を通して、平泉の景観を考える。



1. 中国絵画における景観の表現

中国絵画における「山水画」

- 眼前に広がる景観の認識
- その表現のあり方に対する理論的な思考
- さらにそれを具体的に文章として記す＝画史、画論

→ 哲学的な領域として発展した



1. 中国絵画における景観の表現

「山水画」の発展

- 技法上の発展 ＝淡墨、着色
- 「景観」の認識 ＝ひとの目に、山や川、湖や海、空がどのように見えるか
- 自然の地形に対する「視線」のあり方

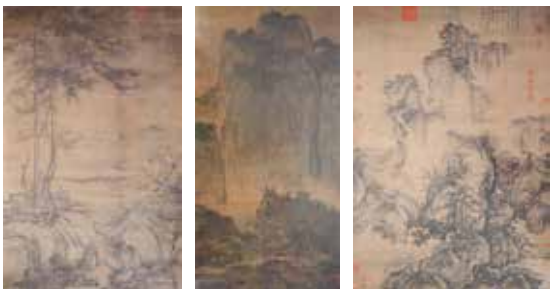
- 「三遠」 遠近法に関する考え方＝北宋時代に大成

1. 中国絵画における景観の表現

「三遠」

- 李成(919－967頃)、范寛(950頃－1032頃)、郭熙(1023－1085)がそれぞれの作品において示した構図
- ① 平遠：少し高い所に立って、手前に水あるいは平原を置いて遠くの間を見通す構図。
- ② 高遠：ふもとから見上げるように山を見る構図。
- ③ 深遠：平遠と高遠を統合し、描かれた主山の後方に、さらに広がる景色（谷や山）を見る構図

平遠  伝李成「喬松平遠図」澄懷堂美術館	少し高い所に立って、手前に水あるいは平原を置いて遠くの山を見通す構図。	高遠  范寛「溪山行旅図」故宮博物院（台北）	ふもとから見上げるように山を見る構図
--	--	---	---------------------------

深遠  郭照「早春図」故宮博物院（台北）	平遠と高遠を統合し、描かれた主山の後方に、さらに広がる景色（谷や山）を見る構図	 伝李成「喬松平遠図」＝平遠 范寛「溪山行旅図」＝高遠 郭照「早春図」＝深遠	
--	--	---	--

1. 中国絵画における景観の表現 「三遠」 ● 自然景に対して画家がどのような景観を見だし、それをどのように表現するか ● 中国絵画の視点＝単に目に「見えている形」ではなく、「風と光」をどう読み取るか だと言われている	 私たちが平泉の景観を見るとき、このような視線が機能しているのではないだろうか
--	--

2. 平泉の景観—自然の景観と人工の景観  従来、「仏国浄土」平泉の彼岸と此岸の造形というテーマで考えられてきたのは、柳之御所から平泉の町を西に貫いて金鶏山を見る、という視線であった。	2. 平泉の景観—自然の景観と人工の景観  山だけに注意を払えば、「高遠」にあたるとも言える。しかし山は低く、目前の無量光院、金鶏山の南方に展開する毛越寺や、観自在王院の伽藍と苑池に貯えられた水面の煌めきを見れば、これは「平遠」であるとも言える。
---	---

2. 平泉の景観—自然の景観と人工の景観



北上川東岸の観音山・大部ヶ岩から見た北上川とその東岸の平地、平泉中心部、そしてその後方に遠く広がる栗駒山を中心とした山々の景観

2. 平泉の景観—自然の景観と人工の景観



「深遠」には、いくつかの解釈があるとされるが、この平泉一帯の眺望を見るとき、「高遠」と「平遠」を手前に置きつつ、さらに後方へ遥かに広がる、「深遠」と呼ぶべき景観を感じる。

2. 平泉の景観—自然の景観と人工の景観



四季折々、木々が色づき、雨風雪霧によっても賦彩の変化があり、さらに朝夕の陽光を浴びればその峰々が光り輝く眺望の美しさは、この地のかげがえのない景観であるに違いない。

3. 浄土空間としての平泉一山に囲まれた景観



3. 浄土空間としての平泉一山に囲まれた景観



空(そら)は、どのように認識されるか



伝李成「喬松平遠図」＝平遠



范寛「溪山行旅図」＝高遠



郭熙「早春図」＝深遠

中国 墓室壁画の場合

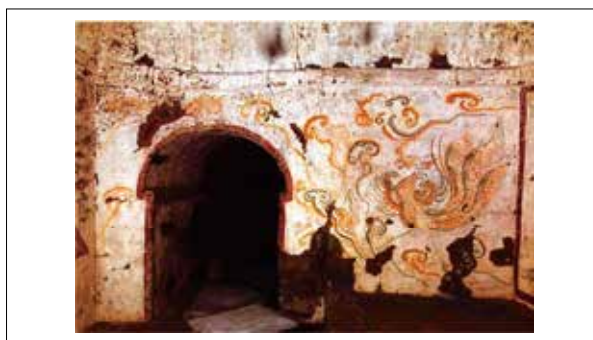


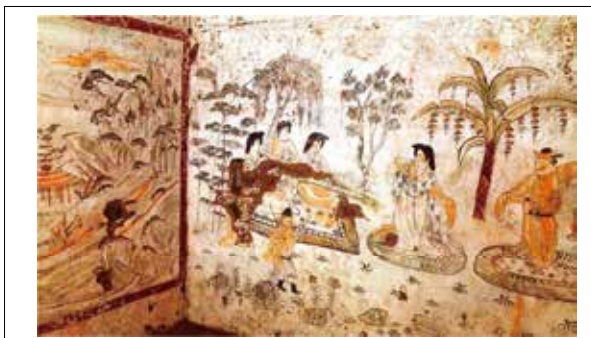
陝西省・西安交通大学前漢壁画墓 紀元前1世紀

中国 墓室壁画の場合



山西省・忻州九原崗北朝壁画墓 6世紀





斑鳩・法隆寺の空に見る浄土景觀



法隆寺金堂 第6号壁：旧写真

斑鳩・法隆寺の空に見る浄土景觀



法隆寺金堂 第6号壁阿弥陀浄土図：旧写真



中国・敦煌莫高窟第322窟 阿弥陀五十二菩薩図

斑鳩・法隆寺の空に見る浄土景觀



法隆寺金堂 第6号壁阿弥陀浄土図：旧写真

斑鳩・法隆寺の空に見る浄土景觀



山西省・忻州九原崗北朝壁画墓

斑鳩・法隆寺の空に見る浄土景觀



4. おわりに

●法隆寺・金堂第6号阿弥陀浄土図

- ◆金堂西壁に配置された第6号阿弥陀浄土壁は、この西日を強く意識し、その太陽がやがて沈む生駒のやまなみを強く意識する中で描かれたのではないだろうか。

●平泉を築いた人びと、暮らした人びとにとっての景觀はどのようなものであったのか

- ◆すでに往時の人びとの痕跡は地上から姿を消したが、変わることのない山と水、そして空がつくる雄大な景觀は、現在を生きる私たちに、それを教えてくれるはず

研究報告2 「出土文字資料の集成的研究」

平泉出土文字資料へのアプローチ (4) 「磐前村印」

三 上 喜 孝

はじめに

柳之御所跡第50次調査で出土した「磐前村印」については、すでに出土印そのものの特徴については平川南氏¹が、その歴史的意義については入間田宣夫氏²や大石直正氏³が論じており、基本的な論点は出尽くしていると思われる。本報告では、「磐前村印」についてのこれまでの歴史的評価について確認し、あらためて、古代印に関する制度や実態、東北地方の古代社会という観点から、「磐前村印」の意味を考察することを目的とする。

1. 「磐前村印」の概要

1999年の柳之御所跡第50次調査では、堀内部の中心建物群の北東側の発掘調査がおこなわれ、12世紀代と思われる複数の建物跡や井戸状遺構を検出した。そのうちの50SE3井戸状遺構から、かわらけ、国産陶器片、中国産白磁皿片、白磁四耳壺、木製品などとともに、銅印が発見された。

銅印の大きさは、縦4.7cm、横4.7cmの正方形で、角はやや丸みを帯びている。印面から紐頂部まで高さは3.7cm、重量は167.4gで、大きさのわりには重量感がある。紐は弧紐無孔（紐の上端部が円弧状を呈し、孔の開いていないもの）、銅の鑄造印だが、型から取り出した後に細部を工具等で調整している。印面の文字は楷書体で「磐前村印」とあり、印面の凹部に部分的に朱と思われる赤色顔料が残存している。紐裾部には印の方向を明示する「上」の文字が刻印される。

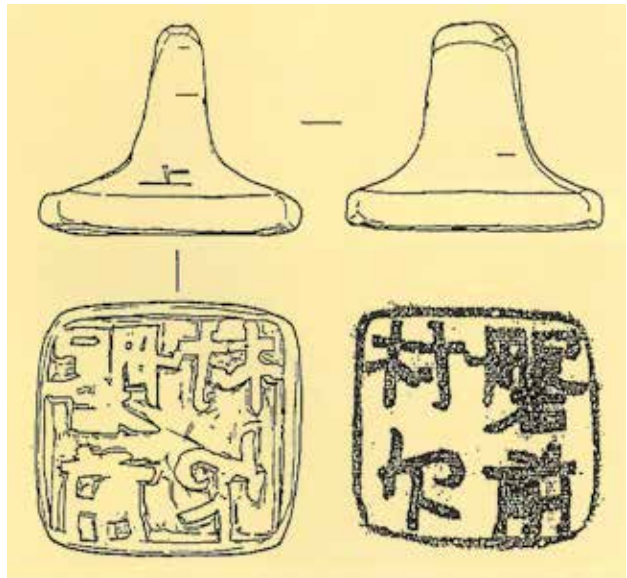


図1 「磐前村印」『白い国の詩』555より

印面の4字目「印」の字形は、あまり見慣れない形をしているが、楷書体の「印」を簡略化した形であり、千葉県八千代市出土の「山辺郡印」（国立歴史民俗博物館蔵、重要文化財）をはじめとして、後述する「国府厨印」や「物部私印」「阿部私印」なども同様の字形であり、むしろこの字形は古代印としての特徴を兼ね備えていると判断できる。

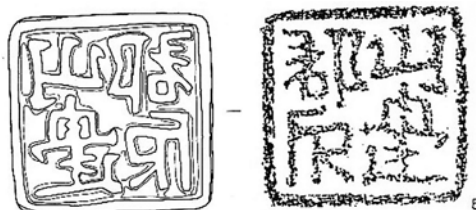


図2 「山辺郡印」の印面（左）と印影（右）



図3 「物部私印」の印面（右）と印影（左）

2. 「磐前村印」と類似の印

「磐前村印」と形態的特徴が類似しているのが、宮城県七ヶ浜町の鼻節神社に神宝として伝わっていた「国府厨印」である。方4.1cm、高さ3.9cmの弧紐無孔の銅印で、印面の書体も楷書を基調としている。すなわち法量、形態的特徴、印面の書体などの面で「磐前村印」と共通している。

この印については、鼻節神社のある花渚浜から昆布や鮑などの海産物を惣社などに貢納するための所領「国府厨」が用いた印ではないかとする説⁴や、陸奥国府内の部局の一つである厨の管理を担当する国府官人

が国府内の食料出納などの際に用いた印ではないかとする説⁵もある。いずれにしても国府の一部局の印として作られたことになり、国府下の役所である郡印の法量や規格を意識して作られた可能性がある。

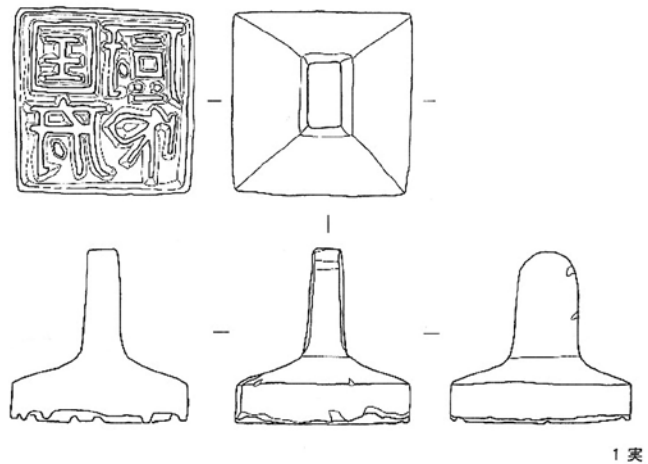


図4 「国府厨印」
(図2～図4 国立歴史民俗博物館『日本古代印集成』)

3. 古代印章制度の概要

次に古代印章制度の概要について見ておきたい。日本における公印（官印）制度は、中国の隋唐の制度の影響を受けて、大宝元年（701）制定の大宝律令より始まった。同年、「新印の様（見本）」を頒布し、その後ただちに内印（天皇御璽）と外印（太政官印）が鑄造されたらしく、和銅4年（711）にはすでに外印の偽印が作られている。ついで慶雲元年（704）、鍛冶司が「諸国印」を鑄し、諸国での公印の本格的使用が始まった。養老3年（719）に中務省を除く七省（式部・治部・民部・兵部・刑部・大蔵・宮内）と春宮坊に印各一面が支給され、中央諸司でも本格的に公印制度が施行された（中務省印に関する記事がみえないのは、七省に先行して鑄造されたためであろう）。このようにして8世紀初頭には各官司の公印が出揃うが、古代の律令国家が高度な官僚制を構築し、文書行政を貫徹していく上で、公印制度の整備が不可欠であったことをこれは示している。

古代の公印はすべて、銅をはじめとする複数の金属元素を主要な成分とする、いわゆる青銅製の鑄造印で、令制官司のうち典鑄司・鍛冶司・内匠寮などがその製作にあたった。養老公式令によれば、内印（天皇御璽）は方三寸（約8.7cm）、外印（太政官印）が方二寸半（約7.3cm）、諸司印が方二寸二分（約6.5cm）、諸国印が方二寸（約5.8cm）と、権威の大きさが印面の大きさをそのまま示しており、現存する印影からも令の規定通り実行されていたことがわかる。このほか、公印に準ずる印として、律令の規定にはないが、倉印、郡印、軍団印、寺印などがある。なお、『拾芥抄』には「郷印一寸」という記載があり、郡印の下に郷印が存在したことも想定される。

古代の印章は官印が主体であり、私印の使用は当初原則として認められていなかった。印の鑄造は国家の特権と考えられていたのである。天平宝字2年（758）、藤原仲麻呂が恵美押勝の名を賜った際に、同時に「恵美家印」が付与されたのは、仲麻呂の権威の大きさを示す事例である。だが実態としては私印の捺されている文書が奈良時代の正倉院文書にも散見し、出土印としても私印が各地から発見される。貞観10年（868）には家印・私印の使用は公認されるが（『類聚三代格』貞観10年6月28日太政官符）、このときに印面の法量を方一寸五分以内と規定している。実際に出土した私印の法量も方一寸五分以内がほとんどであり、公印に抵触しない範囲で私印が使用されていたらしい。

次に出土印・伝世印に着目すると、古代公印の形状をとどめている倉印や郡印が実物で残っており、鈕（つまみ）の形が弧鈕無孔（頭部が円弧状を呈し、孔のあいていないもの）である点が特徴である。これに対して、これまで見つかった私印の多くが蒼鈕有孔（頭部が花卉状を呈し、孔のあいているもの）であり、公印とは鈕の形を意識的に違えていた可能性がある。逆にいえば、弧鈕無孔であるか、蒼鈕有孔かは、公印系統であるか私印であるかを区別する際の指標となりうる。

4 私印の実例 ―群馬県出土の2つの私印―

では実際に、私印というのはどういうものであったのだろうか。ここでは、群馬県から出土した2つの私印についてみてみることにしよう。

群馬県高崎市の矢中中学校建設にともなう発掘調査（矢中村東遺跡）では、「物部私印」と刻まれた印章が見つかった。平安時代の水田にともなう水路から出土し、3.7cm四方の印面を持つ鑄造製の銅印である⁶。

「物部」は金井沢碑の碑文中に「物部君午足」がみえ、『続日本紀』天平神護元年（765）11月戊午朔条には「上野国甘楽郡の人中衛物部蜷淵ら五人に、姓を物部公と賜う」とあり、群馬県西部を中心に物部の分布が確認される⁷。この地域の有力豪族の私印であると考えられる。

前橋市の推定上野国府から出土した「阿部私印」は、平安時代の竪穴建物跡から出土した⁸。3.63cm×3.84cmの印面を持つ鑄造製の銅印で、「物部私印」とほぼ同様の法量とみてよい。2点の私印は、私印の印面の法量として定められた「方一寸五分以内」を遵守して作られている。

興味深いのは、鈕の部分である。「物部私印」は私印に特有の蒼鈕有孔であるのに対し、「阿部私印」は公印に特有の弧鈕無孔を呈している。その点で「阿部私印」は特殊な私印と位置づけられる。「阿部私印」が公印に特有の弧鈕無孔であることの意味は不明だが、ひとつの可能性として、出土地が推定上野国府であり、国府の役人が使用した私印のため、公印の影響を受けて作られたとは考えられないだろうか。ちなみに上野守として左馬頭従五位上・安倍雄能麻呂（弘仁6年（815）1月14日～）（『日本後紀』）、上野介として従五位上・安倍貞行（貞観7年（865）1月27日～）（『日本三代実録』）、従五位上・安倍興行（元慶8年（884）3月9日～）（『日本三代実録』）の名がみえる。

ちなみに私印が公認されたのは、前述のように貞観10年（868）なので、前二者は年代が合わず、可能性があるとするは安倍興行だが、印面の表記が「阿部」である点は注意を要する。



図5 「物部私印」の印面（左）と紐（右）



図6 「阿部私印」の印面（左）と紐（右）

5 「磐前村印」の性格

さて、あらためて「磐前村印」に注目してみる。この印の評価をめぐっては、公印を意識した形態を有していることが明らかであることを前提とした上で、たとえば平川南氏は「その特徴は公印と私印両方の要素を合わせて持っている」と評価している。しかし私は、「磐前村印」が、律令制下の郡印を意識した、きわめて公印的性格の強いものであったのではないかと考えている。

これまで「磐前村印」との関係ではあまりふれられてこなかったと思われるが、福島県いわき市の番匠地遺跡からは、「磐城郡印」と思われる9世紀代の印を鑄造した鑄型片が出土している。残存する印面の鑄型部分には「磐」「郡」の文字が確認されており、復元すると5cm四方の大きさになることから公印の「磐城郡印」とみて間違いなさだろう。もっとも厳密に言えば郡印は律令の規定にはないが、郡司が作成する公文書には必ず郡印が捺されていることから、公印とみなして差し支えない。

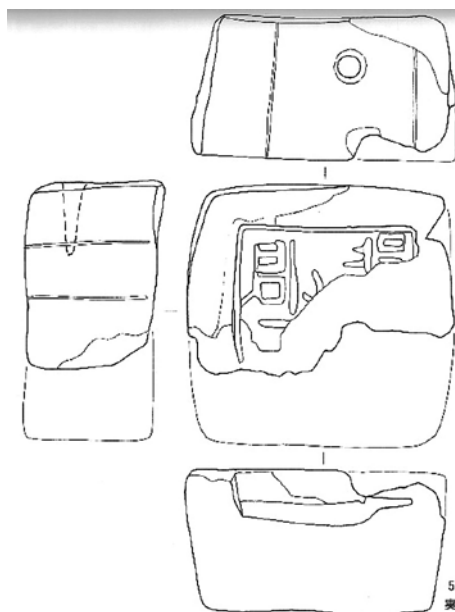


図7 「磐城郡印」鑄型
(国立歴史民俗博物館『日本古代印集成』)

さてこの「磐城郡印」の鑄型を観察すると、印面の文字の彫り方がきわめて浅い点が、「磐前村印」と共通している。つまり彫り方の深浅は公印であるか否かを判断する決め手にはならないということである。さらに鑄型に残る「郡」の文字からもわかるように、全体が楷書体であったことも共通する。一般に郡印は8世紀後半の一時期に楷書体の郡印が作られるものの、平安期のものは中央の八省印や諸国印と同様に篆書体であるという傾向が指摘されるが⁹、その一方で「磐城郡印」鑄型のように例外が存在した点にも留意する必要がある。篆書体＝公印的、楷書体＝私印的、したがって「磐前村印」は楷書体だから私印的性格を持つ¹⁰、とは必ずしも言えないのではないだろうか。そもそも「国府厨印」もまたそのことを示していると思う。

このように考えると、「磐前村印」は、その法量といい、形状といい、公印としての郡印をきわめて意識した銅印であるとみなすことができる。そこで次に問題になるのは、これが「郡印」ではなく「村印」であるという点である。この点も論じ尽くされてはいるが、いまいちど、古代の文献史料に即して考えてみることにしたい。

6 「村印」と「郡印」

すでにこれまでの研究で指摘されているように、古代の東北地方では郡相当の行政単位を「村」と称する場合があった。その点に関する史料をいくつかあげてみる。

【史料1】『続日本紀』靈龜元年（715）10月丁丑条

陸奥国の蝦夷第三等邑志別君宇蘇弥奈が、「私たちは親族が死亡し、子孫数人が、常に狄徒にかすめ奪われることを恐れています。香河村に郡家を作り建てて、編戸の民として、安心して暮らせることを願います」と申し出てきた。また、蝦夷の須賀喜美古麻比留らが、「先祖以来、昆布を献上してまいりました。常にこの地で採集して、ひとときも欠かしたことはありません。いま国府からはその距離が遠く、往還するのに苦勞しております。閑村に郡家を建てて、一般の人たち（百姓）と同じように扱っていただければ、親族を率いてこれからも長く貢納することができ

ます」と申し出てきた。ならびにこれを許した。

この記事は、古代東北地方における郡と村の関係を知らることのできる象徴的な史料で、東北地方の「村」を基盤として、律令制でいうところの郡が置かれたことが如実に示されている。

【史料2】『続日本紀』天平5年（733）一二月己未条

出羽柵を秋田村の清水岡に遷し置いた。

【史料3】『日本後紀』延暦23（804）年十一月癸巳条

秋田城を停廢して周辺を秋田郡とし、城周辺に居住する者は当地に本籍を有する土着の者、浪人を問わず秋田郡所属の民とせよと令した。

天平5年に、山形県の庄内地方にあった出羽柵が北上して秋田県秋田市の清水の岡に移転した。のちにこの城柵は「秋田城」と改称されるが、興味深いのは、延暦23年にそれまで秋田城という特別行政区が秋田郡となったことである。つまりこの二つの記事を合わせると、秋田村→秋田城→秋田郡といった行政単位の変遷が確認でき、秋田村もやはり建郡の母体だったことがわかる。

【史料4】『続日本紀』宝龜7年（776）五月戊子条

出羽国の志波村の賊が叛逆し、出羽国の軍と戦ったが官軍が不利であった。そこで下総・下野・常陸等の国の騎兵を徴發してこれを討たせた。

この「志波村」は、のちに陸奥国に組み込まれ、志波郡として建郡される地域(岩手県紫波郡を中心とした地域)を指している。「出羽国志波村」という表記には、郡に編成されない村が国の下に位置づけられていた当時の実態が垣間見える。

古代の「村」については、平川南氏が「伊治村」を事例として考察されている¹¹。それによると、陸奥国では神護景雲元年（767）10月に伊治城が完成し、その後もと伊治城とされたところに栗原郡を建郡している。さらにその後の神護景雲3年（769）6月には、「浮宕（浮浪・逃亡）」の百姓2500人余りを陸奥国伊治村に遷置したとあり、ここに「伊治村」が登場する（『続日本紀』）。この「伊治村」について平川氏は、（1）栗原郡がいまだ確立せず混迷状態で、伊治村と称したと解する、（2）伊治村から栗原郡が成立した過程で、令制の郷などに編成されなかった従来通りの未編戸集落と理解する見方、の2つの可能性を指摘している。いずれにしても「伊治村」は、城の造営や建郡の過程で、「不調な状況下に置かれた地域であったことを示す」という。そして結論として、「村」の柔軟性のある機能を律令国郡里制の補完として適用させたものが古代の広域「村」の特色であり、この点から説明できる「村」は、中世社会には引き継がれなかったとする。

以上、わずか4例を見てきたが、古代東北地方の「村」は、律令制下の建郡の母体となる広域の地域として認識されていたと思われる。古くからの「村」の上に、律令制的な「郡」という行政単位がかぶさってくる地域もあれば、建郡の対象から外れる地域は「村」として残り続けたのである。11世紀以降、律令制が弛緩していくにつれて郡の支配が衰えると、村は郡に代わる行政単位として一時的に立ち現れてくるのではないだろうか。古代の公印的性格を持つ「磐前村印」はそのような文脈の中で理解することはできまいか。もちろん、一方でこの「村」を中世的な「村」の文脈の中で説明でき



図8 東北の村の広域エリア図（平川南2016）

る可能性もあり、この点については、さらなる検討が必要となるであろう。本稿では、「磐前村」を古代東北社会の「村」の文脈に位置づける可能性を検討してみたものである。

おわりに

大石直正氏は、「磐前村」は磐井郡の南の部分に11世紀に新しく生まれた、まだ荘とも保とも決まらない過渡的な段階のものではなかったか、そして磐井郡の南、栗原郡内の三迫川流域の「岩ヶ崎」がその故地ではなかったかと推定している¹²。この地は後に摂関家領の高鞍荘になる地域と考えられ、藤原頼長（1120～1156）の日記『台記』にみられるように、父・忠実（1078～1162）から頼長が伝領した、高鞍荘をはじめとする陸奥・出羽の5カ所の摂関家荘園は、奥州藤原氏二代目の基衡が現地管理者となり、中央貴族と年貢の交渉していた¹³。

磐前村は、高鞍荘が成立する前から奥州藤原氏が支配をしていた地域で、それゆえに奥州藤原氏の手元に磐前村印があった。12世紀前半頃にこの地域が高鞍荘として立荘されると、行政単位としての磐前村の支配者から摂関家領荘園の管理者へとその役割が変わり、「磐前村印」が不要になったために井戸に廃棄されたのではないだろうか。

【参考文献】

- 注・1 平川南「発掘された村の印」『白い国の詩』555、2002年
- 注・2 入間田宣夫「平泉柳之御所跡出土の磐前村印について」『最新情報 出土白磁四耳壺と印章 柳之御所資料館開館記念講演資料』ふれあい歴史のさと事業推進委員会、1999年、同「平泉柳御所出土の「磐前村印」をめぐる」『平泉の政治と仏教』高志書院、2013年
- 注・3 大石直正「平泉柳之御所跡発見の「磐前村印」と荘園公領」『米沢史学』20、2004年
- 注・4 大石直正「セヶ浜と国府厨印」（『中世北方の政治と社会』校倉書房、2010年）
- 注・5 大平聡「『国府厨印』小考」東北学院大学中世史研究会『六軒丁中世史研究』6、1999年
- 注・6 群馬県高崎市文化財報告書57『矢中遺跡群（Ⅶ）矢中村東遺跡』高崎市教育委員会、1884年
- 注・7 令和5年度前橋・高崎連携事業文化財展『東国千年の都 文字だらけ 出土文字資料からみた古代の前橋・高崎』リーフレット、2024年
- 注・8 注7リーフレット参照。
- 注・9 平川南「古代郡印論」『国立歴史民俗博物館研究報告』79、1999年
- 注・10 平川南「岩手県平泉町柳御所遺跡出土銅印」『最新情報 出土白磁四耳壺と印章 柳之御所資料館開館記念講演資料』ふれあい歴史のさと事業推進委員会、1999年
- 注・11 平川南「古代の「村」は生きている」国立歴史民俗博物館・小倉慈司編『古代東アジアと文字文化』同成社、2016年
- 注・12 大石直正注（3）論文。
- 注・13 『台記』仁平3年（1153）9月14日条

第4回平泉学フォーラム（2023年度）
「出土文字資料の集成的研究」
平泉出土文字資料へのアプローチ（4）「磐前村印」

2024年2月4日（日）

国立歴史民俗博物館 三上喜孝

これまでの発表内容

- ①2020年度 「人々給食日記」にみる饗宴と文字
- ②2021年度 片仮名木簡
- ③2022年度 折敷再利用木簡



はじめに

- ・柳之御所跡第50次調査で出土した「磐前村印」については、すでに出土印そのものの特徴については平川南氏が、その歴史的意義については入間田宣夫氏や大石直正氏が論じており、基本的な論点はすでに出尽くしていると思われる。本報告では、「磐前村印」についてのこれまでの歴史的評価について確認し、あらためて、古代印に関する制度や実態、東北地方の古代社会という観点から、「磐前村印」の意味を考察することを目的とする。

柳之御所遺跡

- ・奥州藤原氏三代秀衡の政庁跡とされ、遺跡の中心部は空濠で囲まれた掘立柱建物群や園池をもつ空間で構成されており、儀式・宴会用の食器や土器が大量に出土している。



1. 「磐前村印」の概要

- ・1999年の柳之御所跡第50次調査
- ・堀内部の中心建物群の北東側の発掘調査がおこなわれ、12世紀代と思われる複数の建物跡や井戸状遺構を検出。そのうちの50SE3井戸状遺構から、かわらけ、国産陶器片、中国産白磁皿片、白磁四耳壺、木製品などとともに、銅印が発見。
- ・銅印は、印面4.7cm四方の正方形で、角はやや丸みを帯びている。印面から紐頂部まで高さは3.7cm、重量は167.4gで、大きさのわりには重量感がある。紐は弧紐無孔、銅の鑄造印だが、型から取り出した後に細部を工具等で調整している。印面の文字は楷書体で「磐前村印」とあり、印面の凹部に部分的に朱と思われる赤色顔料が残存している。紐裾部には印の方向を明示する「上」の文字が刻印される。

1. 「磐前村印」の概要



平川南「発掘された村の印」
『白い国の詩』555、2002年より

「磐前村印」の「印」の字



「磐前村印」



「山辺郡印」
（千葉県八千代市出土）



「物部私印」
（群馬県高崎市出土）

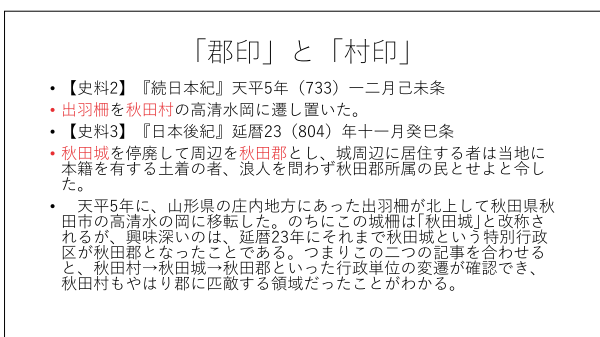
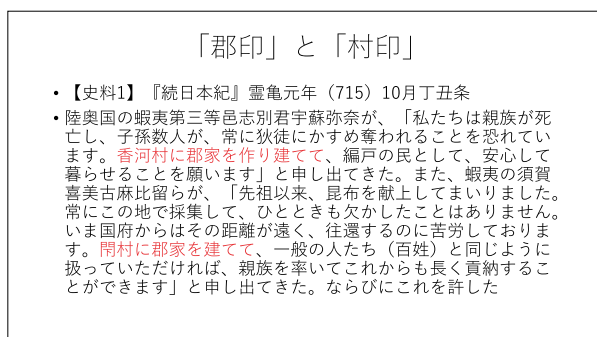
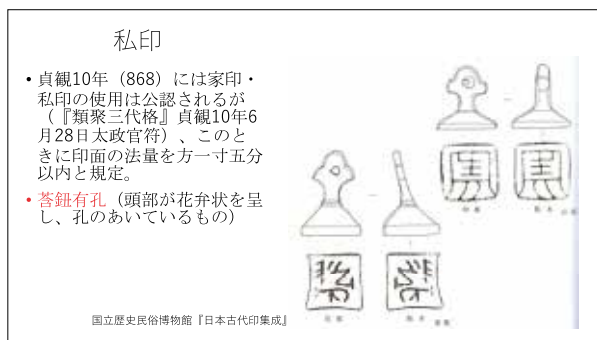
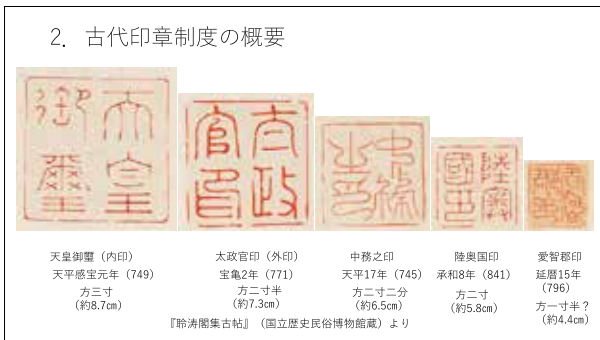


「阿部私印」
（群馬県前橋市出土）

類似の印章—「国府厨印」—

- ・宮城県七ヶ浜町の鼻節神社に神宝として伝わっていた「国府厨印」は、印面4.1cm四方、高さ3.9cmの弧紐無孔の銅印で、印面の書体も楷書を基調としている。すなわち法量、形態的特徴、印面の書体などの面で「磐前村印」と共通している。
- ・この印については、鼻節神社のある花刈浜から昆布や鮑などの海産物を惣社などに貢納するための所領「国府厨」が用いた印ではないかとする説や、陸奥国府内の部局の一つである厨の管理を担当する国府官人が国府内の食料出納などの際に用いた印ではないかとする説もある。いずれにしても国府の一部局の印として作られたことになり、国府下の役所である郡印の法量や規格を意識して作られた可能性がある。





「郡印」と「村印」

- ・【史料4】『続日本紀』宝亀7年(776)五月戊子条
- ・出羽国の志波村の賊が叛逆し、出羽国の軍と戦ったが官軍が不利であった。そこで下総・下野・常陸等の国の騎兵を徴発してこれを討たせた。
- ・この「志波村」は、のちに陸奥国に組み込まれ、志波郡として建郡される地域(岩手県紫波郡を中心とした地域)を指している。「出羽国志波村」という表記には、郡に編成されない村が国の下に位置づけられていた当時の実態が垣間見える。
- ・「磐前村印」の「村」は、古代東北地方に特有の「村」の伝統を引いているか？それとも中世的な「村」の萌芽か？議論が分かれるところだが、ここでは前者の可能性を指摘しておきたい。

「伊治村」と古代の広域「村」

- ・陸奥国では神護景雲元年(767)10月に伊治城が完成し、その後も伊治城とされたところに栗原郡を建郡している。さらにその後の神護景雲3年(769)6月には、「浮岩(浮浪・逃亡)」の百姓2500人余りを陸奥国伊治村に遷置したとあり、ここに「伊治村」が登場する(『続日本紀』)。
- ・この「伊治村」について平川氏は、(1)栗原郡がまだ確立せず混沌状態で、伊治村と称したと解する、(2)伊治村から栗原郡が成立した過程で、令制の郷などに編成されなかった従来通りの未編戸集落と理解する見方、の2つの可能性を指摘している。いずれにしても「伊治村」は、城の造営や建郡の過程で、「不調な状況下に置かれた地域であったことを示す」という。
- ・そして結論として、「村」の柔軟性のある機能を律令国郡里制の補完として適用させたものが古代の広域「村」の特色であり、この点から説明できる「村」は、中世社会には引き継がれなかったとする(平川南「古代の「村」は生きていた」)。

古代東北の村の 広域エリア図

- ・平川南「古代の「村」は生きていた」(『古代東アジアの文字文化』同成社、2016年)



おわりに

- ・大石直正氏は、「磐前村」は磐井郡の南の部分に11世紀に新しく生まれた、まだ荘とも保とも決まらない過渡的な段階のものではなかったか、そして磐井郡の南、栗原郡内の三迫川流域の「岩ヶ崎」がその故地ではなかったかと推定している。この地は後に摂関家領の高鞍荘になる地域と考えられ、藤原頼長の日記『台記』にみられるように、奥州藤原氏二代目の基衡が現地管理者となり、中央貴族と年貢の交渉していた。
- ・磐前村は、高鞍荘が成立する前から奥州藤原氏が支配をしていた地域で、それゆえに奥州藤原氏の手元に磐前村印があった。12世紀前半頃にこの地域が高鞍荘として立荘されると、行政単位としての磐前村の支配者から摂関家領荘園の管理者へとその役割が変わり、「磐前村印」が不要になったために井戸に廃棄されたのではないだろうか。

令和5年度「第4回平泉学研究会」実施報告

- 1 日 時 令和6年2月3日（土）13：30～17：10
- 2 場 所 奥州市水沢グランドホテル 平安
- 3 主催・共催 岩手県、岩手県教育委員会、岩手大学、岩手大学平泉文化研究センター
- 4 対 象 研究者（県内文化財関係担当者、世界遺産シンポジウム参加者、平泉関係研究者、共同研究者等を中心に事前案内）
- 5 実施方法 対面を基本とし、会場をハブとした ZOOM による意見交換を併用。
- 6 発 表 者

【共同研究に関する報告】

研究報告①『平泉の彼岸と此岸の造形に係る比較研究』

奈良大学 教授（国立文化財機構東京文化財研究所名誉研究員） 岡田 健

研究報告②『出土文字資料の集成的研究』

国立歴史民俗博物館 研究部教授 三上喜孝

研究報告③『柳之御所遺跡の考古学的研究』

岩手県教育委員会事務局生涯学習文化財課 櫻井友梓

（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 西澤正晴

研究報告④『東・北アジアにおける政治拠点と平泉の比較研究』

岩手大学平泉文化研究センター 客員教授 佐藤嘉広

研究報告⑤『日本の学校教育における世界遺産の教材化についての研究』

岩手大学教育学部 教授 土屋直人

岩手県教育委員会事務局生涯学習文化財課 長谷川伸大

岩手大学平泉文化研究センター 客員准教授 田中成行

- 7 参加者数 40 名

令和5年度「第4回平泉学フォーラム」実施報告

- 1 日 時 令和6年2月4日（日）10：00～15：30
- 2 場 所 奥州市水沢グランドホテル モーガンホール
- 3 主催・共催
（主 催） 岩手県、岩手県教育委員会、岩手大学、岩手大学平泉文化研究センター
世界遺産平泉保存活用推進実行委員会
（共 催） 一関市教育委員会、奥州市教育委員会、平泉町教育委員会
- 4 対 象 一般
- 5 実施方法 対面による開催、YouTube による後日配信
- 6 発表者
【基調講演】 『北・東アジアからみた平泉』
妹尾達彦氏（中央大学名誉教授）
【共同研究に関する報告】
研究報告① 『柳之御所遺跡の考古学的研究』
県教育委員会（（公財）県文化振興事業団埋蔵文化財センター）
研究報告② 『平泉の彼岸と此岸の造形に係る比較研究』
奈良大学 教授（国立文化財機構東京文化財研究所名誉研究員）岡田 健
研究報告③ 『出土文字資料の集成的研究』
国立歴史民俗博物館 研究部教授 三上喜孝
研究報告④ 『東・北アジアにおける政治拠点と平泉の比較研究』
岩手大学平泉文化研究センター 客員教授 佐藤嘉広
研究報告⑤ 『日本の学校教育における世界遺産の教材化についての研究』
岩手大学教育学部 教授 土屋直人
岩手県教育委員会事務局生涯学習文化財課 長谷川伸大
【調査成果の報告】
調査報告① 「骨寺村荘園遺跡の調査」 一関市教育委員会 菅原孝明
調査報告② 「長者ヶ原廃寺跡の調査」 奥州市教育委員会 中島康佑
調査報告③ 「白鳥館遺跡の調査」 奥州市教育委員会 及川真紀
調査報告④ 「観自在王院跡の調査」 ※紙面報告
- 7 参加者数 200 名

平泉学研究年報 第4号

令和6年3月22日

発 行 世界遺産平泉保存活用推進実行委員会
(事務局：岩手県文化スポーツ部文化振興課)
〒020-8570 岩手県盛岡市内丸10-1
編 集 岩手県教育委員会事務局生涯学習文化財課
印 刷 株式会社 興版社
岩手県盛岡市中野1-4-14
TEL 019-624-3456

HIRAIZUMI GAKU KENKYU NENPO

Annual Report of the Hiraizumi New Studies

Contents

Keynote speech

Hiraizumi as seen from North and East Asia

SEO Tatsuhiko

Research Report

Comparative study on the planning of Hiraizumi “This shore” and “Other shore”

OKADA Ken

Study on the collection of excavated written materials

MIKAMI Yoshitaka

Contents of the event

Report of the 4th meeting for Hiraizumi Studies

Report of the 4th Forum for Hiraizumi Studies

**World Heritage Hiraizumi Preservation and Utilization Promotion Executive Committee
Iwate Prefectural Government and Iwate Prefecture Board of Education**

10 -1 Uchimaru, Morioka City, Iwate Prefecture 020-8570, Japan



令和5年度文化庁芸術振興費補助金
(地域文化財総合活用推進事業)